

観光地受入態勢ステップアップ事業 「県北県央観光開発事業」報告書



観光受入態勢ステップアップ事業「県北・県央観光開発事業」レポート

長崎「県北・県央ぶらり散策」

(出発)

長崎県佐世保市の中心部アーケード街、四ヶ町商店街の戸尾町側入口に細長い三角形の先っぽ一角をちょん切ったような台形の小さな公園があります。京町児童公園、ここは以前公園というより噴水があっただけの場所でした。いつからその噴水がなくなり、公園になったのか記憶がありません。その京町児童公園に「五足の靴文学碑」があります。昭和 53 年の設置らしいのですが、初めて見たのはもっと前のような気がします、記憶違いなのでしょう。初めて観た時、バカな自分は五個の靴と勘違いして、1つ足りないのか多いのか、何の意味が隠されているのだろうかと考えたりした。足りないのは自分のアタマでした。ただ、そのお蔭ですっと文学碑は記憶に残っていました。文学碑には五人の名前が刻まれています。

与謝野寛(鉄幹)・平野萬里・北原白秋・吉井勇・太田正雄(木下杢太郎)

思えば、日本文学史にその名を残す錚々たる詩人・作家たちの若き日に旅した足跡ともいうべき記念碑でした。

早速、今回の観光素材調査取材のための相方に頼んで撮ってもらったデジカメを覗くと碑の後ろに道路を隔てた佐世保バーガーの絵の看板が大きく写っています。これは良い、100年前と現代が時空を越えて映っているようで、そうだ、今回の調査取材は此处を出発点にしよう決めました。

しかし、若い五人の佐世保の最初の印象はなかなか辛辣。

「汽車から降りた五人は、予期に反して、この町の汚いのと淋しいのに驚きながら、平戸行の汽船を尋ねて海岸の方へ足を運んだ。…(略)」(「五足の靴」岩波文庫より)

ちょうど同じ年代の頃、佐世保の小学校へ通っていた作家の林芙美子さんは一時暮らしたある街を指すに際して「門司のように活気のある街でもない。長崎のように美しい街でもない。佐世保のように女の人が美しい町でもなかった…」(「新版 放浪記」林芙美子著新潮文庫より)と、ほんの短い文章ながら佐世保の印象を綴った言葉とはえらい違いに感じました。

また、五人に戻ると、

「佐世保は思いの外不恰好な街である。一点ぼたりと落ちた墨が、次第に左右

に広がって行くように、一軒の家が次第に膨らんで往ってこの街を形造ったのであろう、ただ徒に細長い、…」と書いています。こちらは、今は西日本自動車道などのバイパスが出来たりと、少し道路状況は変化があるものの現在とあまり変わっていないように思います。地形的なものだからそうなのでしょう。佐世保の街の形は細長く中心街が少し膨らんで、上から観ると、国道 35 号線を中心線にして、ちょうど銀河系を真横からみたような感じでしょうか。ただ、五人が夕方になって街に出ると「極めて盛んな光景(ありさま)、海軍士官がゆく、水兵がゆく、小僧がゆく、職工がゆく、人夫がゆく、乱雑な響きが四辺に満ちて…(略)…一寸奇観だ。」と違った感想を書いており、また、「熱鬧の区(ねつどうのまち)、煙塵の巷、かかる所を過ぎた時、旅情の甚だ切なるを覚えたのはなぜであろう。」となって、K生(与謝野鉄幹)が喧騒の中に哀感の沁みる一編の詩を残しています。(詩は略します)

「ところで、これから何処を廻る？」と相方の大田尾営業部長に問うと「平戸方面に行こうと思います」と応えたので、「そうしましょう。ただその前に、佐世保港をいつもと違った方向から見てみようか」と言ったら「では高後崎でも行ってみましようか」と言うので、先ずは高後崎へ向かいました。

俵が浦半島の海沿いを走り坂道を上っている途中、「高後崎番所跡」と書いてある標柱が見えた。車を停めてもらって此処を見てみようという事になりました。細い茂みの山道や階段を下ると、その坂道の途中に畳八畳ほどの広さの空き地があって二辺が古い石垣になっている。番所跡の案内板がなければ、ただの空き地にしか見えない。

案内板には、

『外国船の来航におびえた幕末近いころ、幕府の命をうけた長崎奉行のさしずでここに番所がおかれた。…(中略)…そして異国船発見の場合は、ただちにノロシをあげて高島の番岳、小佐々の冷水岳とリレーして、平戸藩庁に知らせるしくみであった…』(佐世保市教育委員会 設置 平成元年二月十八日)と記されています。

すぐ下はもう磯辺だがそこに民家もある。磯辺まで下ると石組の突堤があつて単調な波が静かに打ち寄せている。もっと高所から見てみたいと思っていましたが目の前にすぐ海の低い磯辺も良いものでした。向うに見える大きな橋はどこかね？と私が尋ねると相方が、あれは大島大橋ですねと教えてくれました。「へーっ、西海町の大島がこんなに近くに見えるの？」「そうです、左側に大きな煙突のような塔が見えるのが針尾の無線塔です」番所跡の磯辺から見る佐世保港は静かで遠く対岸が見えて「広い港だな」と思

いながら突堤に寄せる波しぶきをいつまでも見ていたい気分になっていると、相方が「時間がないので急ぎましょう」とせかす。仕方がないので車に乗せられ、来た道を引き返しました。海岸沿いの片道1車線を、私たちのだいぶ前を自転車が走っている。本格的サイクリングの出立ちで、逆三角形のいい体格は遠目にも外国人(たぶん休暇中の米兵)と分かりました。だんだんと近づくと、大柄だけドスタイルの良い女性であることが分かりました。自転車専用のヘルメットの後ろに金髪をポニーテールに結んでいる。「女性だったですね」相方が言う。「うん、美人だった」と私。「そういうところは、ちゃんと見とるんですね」「いや、助手席で運転ばしよらんからね…セクハラ的見方になるかね」「そうなるかもしれませんね」私たちは先を急ぎました。

佐世保には外国人(アメリカ人)がたくさんいます。白人系だけではなく、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系、街中を男女の兵士たちが数人で歩いたり、自転車に乗ったり、佐世保の住人には何の違和感もない普通の日常的風景です。それから陸・海の自衛官も普通にたくさん見かけます。もちろん違和感など全くありません。港にはアメリカ海軍の艦船、海上自衛隊の自衛艦が碇泊する港町なのです。

また、SSK(佐世保重工業)を中心に多くの造船所があり、大型のタンカーなどの商船も修理などでドック入りしています。おもしろいところでは、地球深部探査船「地球」もよくSSKに寄港しています。初めて見た時は、大型ヘリに対応できるヘリコプター甲板、大型クレーンよりも高い鉄塔(デリック(掘削やぐら、高さは海面上から約120m、船底からは130m(世界一))など、その威容に驚きました。

(平戸へ)

「途中、江迎に寄ります」と相方。

「何処に寄ると？」

「寿福寺というお寺です、ここは有名な所ですよ。テレビ局もよく取材に来るところです。庭園が有名で、広間の畳の一部をはがしてアクリル板を置き、庭園を逆さに映して上下同時に観るとです。逆さ庭園です。先日もお話を聞かせてもらいにお伺いしました」

玄関に入り、ごめん下さいと言うと、若奥様が出てこられた。

「どうも、この前はありがとうございました」

「あら、大田尾さん、どうぞ中へお入りください」すると「おや、どうぞ…」と、ご住職も笑顔で出てこられた。

突然の私たちの訪問であったが、皆さん温かく迎えて下さいました。

「その時季になりますとここにアクリル板を敷いて庭園の逆さ紅葉を楽しんで

頂きます。以前はロータリーの皆さんの会合やら、檀家さんたちがたくさんみえてご覧頂いたのですが、コロナの影響で今はほとんどおみえになりません」初めて、しかも突然現れた私にもご丁寧に説明を頂きました。有難いことでした。

相方によると、ある日檀家さんたちが法要か何かで集まっていると広間に並べられていた長テーブルに庭園の紅葉が逆さに映っていて、それがとっても綺麗だったのがアクリル板を敷くはじまりだったそうですとのこと。

この日、残暑厳しい8月のことでしたが、寺内は静寂として、庭園は四季それぞれに美しく蝉の声を聞きながら深緑の夏の庭園を堪能させて頂きました。

「寿福寺」

長崎県佐世保市江迎町 276

真言宗智山派の寺院。山号は「栄久山」。

御本尊 釈迦三尊像

九州二十四地蔵尊第 15 番札所及び九州八十八ヶ所第 76 番札所です。

田平、馬の元の峠を越えるとカブトムシの大きな模型が看板の柱に飾られている道の駅を右手に見て、その反対側左側に「←田平天主堂」と書いてある白い標識が見えた。相方は何も言わずにその標識どおりに左に折れて、キレイに舗装され、そんなに狭くはないが両脇に畑や森を見ながらの道路を 5~6 分走ると、着きましたと言う。綺麗でしょうと相方。なるほど、初めて見る田平天主堂は赤レンガ造りの重厚で美しい教会でした。まっすぐ平戸大橋を渡るのかと思っていましたが、相方曰く「ここを見せたかったとですよ」

一寸下り教会横の案内所の窓口で声をかけ「少し見せて下さい」と言うと、小窓のガラス戸を開けて「ごゆっくりどうぞ、ただ、コロナのために中に入れないうですよ、すみませんけど外からだけでご覧ください」と感じの良いお嬢さんが応えてくれました。「はい、立札にそう書いてありましたね」と私。

「どうやらカトリックの教会はコロナで全て中に入れんらしいですよ、連盟かなんかで決まったようです」と相方が説明する。

既に多くはないが幾人かの観光客が見物している。駐車場には県外ナンバーもあった。

「ねっ、このアングルから撮ると良いんじゃない」と私。

「取りました」と相方。「じゃあ、こっちからは…」、「撮りました」「あの神父さんの像」「撮りました」「ルルドのマリアさま、綺麗やね…」「もう撮っていません」

「田平天主堂」

正式には「カトリック田平教会」

長崎県平戸市田平町小手田免 19

設計・施工 鉄川与助(明治 12 年 1 月 13 日～昭和 51 年 7 月 5 日)※

完成 1918(大正 7)年

※今回の調査取材のために長崎の潜伏キリシタン関係の書籍を、ほんの 2～3 冊ですが読んでみました。その中でこの鉄川与助さんの名は、潜伏・隠れキリシタン研究の草分け的歴史学者 田北耕也さん、生月町博物館「島の館」の学芸員 中園茂生さんと並んで多く出てくる(設計施工者として)お名前です。鉄川与助さんは現在の上五島町の出身で大工の棟梁・建築家です。

「五島へ五島へと皆行きたがる 五島はやさしや土地までも」(外海キリシタンの歌)(松尾潤著 祈りの記憶 長崎と天草地方の潜伏キリシタンの世界 批評社より)

本によれば、大村藩・五島藩の経済的政策協定もあって多くの外海の人々が五島へ移住したがその中にまた多くの潜伏キリシタンがいたとの見解を紹介されています。五島では移住した潜伏キリシタンの人々と先住の仏教徒の人々は地域的に住み分かがあったが開拓や漁などの時には協力して共存していたとのこと。鉄川与助さんは生涯仏教徒だったそうです。しかしその優れた才能と技術者・建築家としての探究心が勝って宗教を越えて教会建築へと向かわせたのでしょうが、もしかしたら五島の人々や土地柄の影響もあったかもしれませんね。レンガ造・石造・木造と多くのカトリック教会堂建築を手がけ、1959 年黄綬褒章、1967 年には勲五等瑞宝章を授与されています。

そして、この田平天主堂は鉄川与助さんのレンガ造教会の集大成であり最高峰と言われているそうです。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産ととして推薦されたそうですが、できたのが大正時代であったこと、田平には隠れキリシタンの歴史がある訳ではないことなどから禁教期との関係性がないとして世界遺産の候補からは外されたそうです。もう少し地理的歴史的背景や経緯を見てくれればと残念に思いますが、そんなことには関わりなく、観る価値の高い見事な素晴らしい教会であり建築物であることに変わりはありません。国指定の重要文化財です。

平戸大橋を渡ってすぐ下左側の広い休憩所へ車を停める。晴天、少し暑いが風が気持ち良い。観光客もけっこういて、平戸大橋や平戸海峡をゆっくりと横切る船舶を背景に写真撮影などをしている。4、5 人の外国人(たぶんアメリカ人)

もいて、一人の小学生くらいの少女がお父さんの手を握ったりお母さんのところへ駆け寄ったり笑顔ではしゃいでいる。

相方はもう何枚も写真を撮って、さあ行きましようかと車へ急かす。

相方の運転する車は、猶興館高校前を右に折れ、海岸沿いを少し走って平戸城登り口の標柱から左に登って、亀岡神社へ着いた。

「平戸城本丸跡に鎮座する。寛永(1631)年平戸藩主松浦棟が祖霊 4 柱を平戸場内の霊椿山に祀ったのが創まり。明治になって霊椿山、七郎、乙宮、八幡の 4 神社を合祀する事となり、明治 11(1878)年に現社地に社殿を営み、翌々13年に各祭神を遷座、現社名に改称して県社に列し、平戸の産土神とされた」とある。

(ウィキペディア)

現在の平戸城天守閣も良く見えます。新型コロナウイルス感染症の影響で境内の中には入れず、私たちが行った時間(お昼過ぎ頃)はほとんど誰もいませんでした。

門の外から手を合わせ、中を覗くと境内本殿建物の横に馬の像があった。私がそれを眺めていると、「昔は本物の生きた馬を奉納していたそうです。それが段々と像や絵になったそうです」と、気付いた相方が横から教えてくれた。

「へーっ、あなたは、神社仏閣に詳しいねえ」と私が言うと、

「いえ、全く関心ありません。観光のこれをする前は、神社とお寺の違いも分かりませんでした」

「えっ…」

車は平戸市役所駐車場に入る。横には幸橋御門と幸橋(さいわい橋、別名オランダ橋、石造アーチ橋、国の重要文化財)があり、いかにも平戸の市役所だなど思う。そんなに広い川幅ではないが、向う岸から徒歩でこのオランダ橋を渡り門を潜って市役所へ入ることができる。

かつて平戸の中心を流れる鏡川には橋が架けられておらず兩岸を船で渡っていた。1669(寛文 9)年に当時の平戸藩主松浦鎮信により初めて木造の橋が架けられ、長年の不便が解消されたことを祝って「幸橋」と命名された。その後、1702(元禄 15)年に鎮信を継いだ松浦棟により同じ名前の現在の石橋に架け替えられた。この時、かつて平戸にあったオランダ商館の石造建築に携わった石工から伝授されてきた技法が用いられたと言われることから「オランダ橋」の別称が生まれた。(ウィキペディア)とあります。

「行きましよう」と相方が言う。「何処へ？」と私。「平戸市役所にです」

「何しに？アポとととと？」

少し無然として「取ってはいませんが…」「で、なんしに？」「観光課へ行きます。コロナで平戸城とか中に入れんとですよ。ですから、中の良い画像が観光課のホームページとかにあれば使わせてもらおうと承諾をもらいにです」「なるほど、しかし、突然行って変に思われんかね？しかも今は昼休みやろ、大丈夫やろか？」「とにかく行ってみます」と相方はシートベルトを外して、車から降りてさっさと役所の玄関へ向かう。その積極的行動力に感服した。急いで後を追った。

フロアに入ると壁の上に歴代の市長の写真が飾られていて、下のテーブルやガラスケースには平戸観光のパンフレットなどがいくつも並べられたり立てかけてある。さて観光課は何階だろうと案内図を二人見ていると、階段から一人の女性職員さんが降りてきたので、事情を説明すると「それなら私で良いですよ」と気安く2階の観光課へ案内してくれました。観光課の職員の方でした。

「画像使うとき電話でこれ使いますと仰って下さればそれで結構です」と承諾を頂いた。「あっ、これコピーいただいて良いですか？」と彼女。「どうぞどうぞ」と私たち。「これ」とは、長崎県から送られてきた今回ステップアップ事業の委託申込書をコピーしてラミネートしたもの。相方の大田尾は私と一緒に動く前に下見がてら単独で世知原や吉井町の石橋群など県北各地の観光資源を探し回っていた。前述した寿福寺やこれから紹介する平戸の最教寺もその一つだが、ときには変なセールスマンと間違われたり、石橋探しで学校の周りを汗だくで廻ったりして不審者を見るような目で(確かにそれは不審だが)見られたりと最初は嫌で堪らなかったという話を聞いて、当社の女性の事務員が委託申込書の金額の書いた部分を隠したコピーをラミネートして、通行手形にしてくださいと数枚作ってくれたのでした。これは行く先々で本当に効果を発揮しました。ちょっと挨拶してこれを見せると理解してもらいました。「よろしく宣伝して下さい」とか「頑張ってください」とのお言葉を頂くようになり、こちらも「県に報告するだけですから宣伝にはならないかもしれませんが、調査など素人ですが頑張って報告します」と応えたりするようになりました。

平戸フェリー乗り場横の平戸港交流広場駐車場に駐車して何処をどんな順番で訪ねようか話し合いました。駐車場の周囲を歩いていると、じゃがたら娘の像があり、像の足元に縦横50センチくらいのセメントの土台に銅板のようなものがあつたので半分ほど覆った雑草をかき分けると、

「にほん こいしや こいしや」の、じゃがたら文の一部が刻まれていました。

1639(寛永 16)年幕府は、平戸のオランダ商館長に対して、長崎平戸に居住するオランダ人子女を調査し、蘭英両国人に嫁がして子女を産んだ日本婦人とそ

の子女をひとり残らず、この年出帆のオランダ船でバタビア(今のジャカルタ)に送り届けるよう申し渡した。長崎平戸の婦女子 40 人余がこの年追放された。これら追放された婦女子は、帰国は許されなかったがキリシタン信仰に関係ない手紙・進物等の文通は許された。(平戸市ホームページほっこりHIRADOより)

さて、五足の靴の 5 人も佐世保港から海路平戸に渡っています。

「平戸には午後二時ころ着いた。」…(略)…「この町を歩いていて気が付いたことは比較的美しい容貌の女が多いことだ。…(略)…この町は美人系だなと興がったが、ただその顔色(タイント)が美しいに過ぎないと思う」

…こんわかもんたちやほんなごて…(この若い者たちは本当に…)と、100 年前の若者たちを 100 年後の年配者(老人と書きたくないので)は思います。垢抜けした女性の多い都会から来た青年たちには地方の女性は素朴に見えるのでしょうか…。

また、こうも書いています。

「夜また散歩して幸橋、阿蘭陀塀に涼風を求めて帰って楼上に仮眠した。水の音、船に荷を積込む声、隣室に喇叭節などが聞こえて、港場の夜の声は何となくしんみりとして哀れ深い。(中略)暗い中に、黄と赤と青の三燈を掲げた汽船が、物を待つように静かに構えているのが見える。」

まずはオランダ商館へ行ってみることにしました。平戸港交流広場の観光案内所から歩いて 5 分くらい、海に面した道沿いにありました。受付の若いお嬢さんに料金を払い、南蛮漆器や南蛮甲冑など展示品を見て回る。そろそろ出ようかとしているところで、ふと思い、やはり写真を撮りまくっている相方に話す。「写真はさ、やっぱり若い女の子たちが楽しそうに地元の食べ物を食べているところなんかあると、親しみがあるし、行ってみようという気持ちを誘うよね。我々の写真にはそれがいいよね」

と、ということで受け付けの美人のお嬢さんを撮影させて頂きました。

平戸オランダ商館(1639 年築造倉庫)

平戸一帯は、1609(慶長 14)年和蘭船が入港し、1641(寛永 18)年長崎出島に移転するまでの約 33 年間、平戸が我国唯一のオランダ貿易港として賑わった。商館は当初、土蔵付き民家を借りてスタートしたが、その後周囲の民家を壊して、新たに建築。本館をはじめ、宿泊所、調理上などが整備された。貿易の積み荷を保管する倉庫も何棟も建築され、1639 年には日本ではじめての西洋の石造建造物とされる「1639 年築造倉庫」が完成。1641 年、幕府の命により商館は取

り壊され貿易は長崎出島に移転した。

2011年9月20日にオープンした「平戸オランダ商館」はこの倉庫を忠実に復元した貴重な建物である。中には当時の貿易に関する資料や貿易品などを展示している。(平戸市 観光課 ほっこりHIRADOより)

「最近ではコロナでいっちゃんお客さんが来らっさんですよ。どうぞ宣伝してください、どうぞどうぞ」写真を撮影しても良いですかと言う相方の質問に館長さんにお応えいただいたのは「松浦史料博物館」。平戸中心部の商店街の坂の上(平戸市鏡川町12番地)に、1893(明治26)年に旧平戸藩主松浦家の私邸として建てられた鶴ヶ峯邸及び松浦家に代々伝わる資料を、第39代松浦隆より寄贈を受け、1955(昭和30)年10月に登録博物館として設立されました。収蔵資料は、国指定重要文化財、県指定有形文化財を含む約3万点余りです。展示資料は平戸や松浦家の歴史を物語るもの約300点です。

博物館庭の、茶室閑雲亭では呈茶を致しております(有料)(「松浦史料博物館」パンフレットより)とのことです。また、平戸オランダ商館は姉妹施設で共通券が利用できます。

私個人的には資料的価値については分かりませんが、禁教期のキリシタン弾圧の「元和大殉教図」(ローマのジェズ教会保管とのことですから写しでしょう、絵の左下の海上には数隻の船があり松浦藩の三ツ星の家紋が描かれていると説明書きにあります)や捕えられたキリシタンへの拷問の絵や踏絵などが印象的でした。特に、遠藤周作さんの小説「沈黙」を最近読み返したばかりだったので「穴吊りの刑」の絵が私の目を引きました。この刑は「この時代最も過酷な拷問と言われた。その内容は、1メートルほどの穴の中に逆さに吊るす、というものであったが、そのやり方は残酷極まりない。吊るす際、体をぐるぐる巻きにして内臓が下がらないようにする。すると頭に血が集まるので、こめかみに小さな穴を開け血を抜く、などそう簡単に死なないようにし、さらに穴の中に汚物を入れ、地上で騒がしい音を立て、精神を苛んだ。(ウイキペディアより 出典「日本キリスト教殉教史」片山弥吉著時事通信社、(片岡弥吉では?報告者))」とあります。因みに天正遣欧少年使節の一人中浦ジュリアンもこの刑で殉教したのですが、そのときともに受刑したのが小説「沈黙」にも重要人物のひとりとして登場するクリストヴァン・フェレイラ司祭でした。

針状結晶のように鋭く天を指す大尖塔、左側にのみ八角塔があるアシンメトリー(左右非対称)で教会堂外部全体が緑色の美しい「平戸ザビエル記念教会」は松浦史料博物館のすぐ近くにありました。

1931(昭和 6)年 4 月に現在の教会堂が建てられ、早坂久之助司教によって献堂式がおこなわれ、献堂 40 周年の 1971(昭和 46)年 9 月に、聖サンフランシスコ・ザビエルの 3 度の平戸訪問を記念してザビエル像が聖堂の脇に建立されたことから「聖サンフランシスコ・ザビエル記念聖堂」とも呼ばれるようになった」(ウィキペディア)とのこと。

相方が撮影した教会堂の写真には、大尖塔の先端にある十字架に白光を放ち輝く太陽が重なって写っていました。

正面教会堂へ上がる階段の右横にルルドの聖母像がありました。田平天主堂と同じくきれいなマリア様です。

「2006 年には、献堂 75 周年とザビエル生誕 500 年を記念してフランスのルルドの泉を模した「ルルド」が敷地内に建設された」(同上)とあります。ここにもルルドの聖母があったので、ルルドの泉について、詳しくはないのですが…。

遠藤周作さんは「ルルドの聖母」という随筆の中でこのルルドの泉を紹介しています。

「…(略)、一つのふしぎな実話をかいてみたいと思います。それはルルドの聖母の話です」とはじまるこの随筆を要約すると、

…ルルドはフランスとスペインの国境、ピレネー山脈の中にある小さな町だが、もしあなたたちがフランスに行って「ルルド」とたずねるなら、その町のいわれを知らないフランス人はまずないだろう。

このピレネーの部落の一つにベルナデットとよぶ少女がいた。親を助け毎日羊の番をする。ある冬、ベルナデットは友だちの少年、少女と山に薪を拾いにいった。この時、信じられないほどふしぎな出来ごとにぶつかった。このできごとが有名な「ルルドの奇跡」の始まりになった。

山の岩の近くで彼女は友だちらと離れて薪を集めていたが、その時、自分のちかくに一人の女性が幻のようにあらわれたのを見た。そしてびっくりしているベルナデットに「自分は聖母である」とはっきり言った。おどろいたベルナデットは友だちのところへ駆けもどりその話をしても信じない。部落に戻っても人々は笑って信じない。彼女の親たちは叱りつける始末。しかし平生からウソ 1 つ言わなかった彼女は笑われても叱られても、あくまでも本当だと主張する。これには部落の人たちも半信半疑になって、「それじゃ一応、その女性を見たという場所に行ってみようじゃないか」ということになり彼等はベルナデットに導かれ、その場所に出かけた。

ベルナデットはその場所に来ると突然、跪き「あの人があらわれた」と言った。しかし他の者たちには何もみえない。ベルナデットが幻影を見ているのか、

気が狂ったのではないかと思う。そんな彼等が「お前の言葉が本当としても、証明がなければな」と叫びはじめた。

その叫びをベルナデットは彼女だけに見える女に訴えた。その女性はやさしく微笑して少女に答えた。

「お前の跪いている地面を掘ってみなさい。水が出ます」

今でもそうだがピレネーの山は水が乏しい。羊飼いたちは羊にのます飲料水に苦しんでいたほどだ。まして今、自分たちが集まってきた山の中に一滴の水も出ぬことは長年の経験で彼等が一番よく知っていた。ベルナデットは言われるままに両手で地面を掘り始めた。水は出てこない。中には軽蔑した表情で笑いはじめる者もでてくる。突然、指を血でそめながらも地面を掘り続けているこの少女が手を動かすのをやめた。泥が水にぬれだしたことがわかったのだ。

これが「ルルドの奇跡泉」の話だ。ベルナデットは後に修道女となった。

そして、今なお「ルルドの泉」からは水が溢れでている。のみならず、今日でもこの泉を求めて、不治の病に苦しんだ病人たちが無数に集まってくるのだ。

医者から絶望を宣告された結核の女、癌を患った男—そういう病人が突然、ふしぎな奇跡に恵まれ一瞬にして健康体となる。

1930年、リヨン大学医学部教授アレクシ・カレル博士は泉の水で難病が快癒したというルルドの奇跡に否定的だった。確かめるため彼はある夏、ルルドに向かう特別列車に乗った。カレル教授は自分のかたわらに寝ている若い女の病人に注意を向けた。結核性腹膜炎で絶望的の症状だった。ところが、この女性の肉親がルルドの泉で彼女の体を拭いてやると、カレル教授の目の前で回復をはじめ、瀕死の結核患者だったその女性は数時間で完治した。彼はこの事実の前に脱帽せざるをえなかった。女性は後に修道女となり病人の世話をして生涯を送っている。

遠藤氏は「お信じになるのも信じられぬのも皆さんの自由です」と書き、カレル博士の著書「人間この未知なるもの」という著書があることを紹介して結んでいます。

既に時間は午後2時を過ぎていました。少々暑さにも疲れて来ていた。そろそろ昼食にしようと、食べる場所を探していたら、「いいところがあります、食べる場所たくさんある所があります」と相方。一旦田平に戻り、「平戸瀬戸市場」に到着。なるほど土産物屋さんとか食堂が集まっています。そのちょっと離れた一角に「漁師直売所百旬館」と看板を掲げたビルがあって、その1階に「平戸 西端夢浪漫」という和風レストランで食事をしました。店長さんにお話を聞くと、このあたりで獲れたイカは呼子にも出荷しているとのこと。お手頃値段の刺身定食をおいしくいただき、暑かったのでノンアルコールビール

も一杯流し込んで、大漁旗を壁に張った広くて明るく感じの良い店内を撮らせてもらいました。

一息ついて、また平戸大橋を渡り、平戸名物「子泣き相撲」で有名な「最教寺」へと向かいました。

駐車場から境内へ入ってすぐのご自宅に挨拶すると、普段着姿のご住職らしい方が出て来られ、「コロナで建物の中には入れませんが、どうぞ良いですよ御覧になってください」と気安くお応えいただきました。境内入口の庭を通り、参道と思われた方へ行こうとすると、相方が「こっちの方が早いですよ」と先を歩く。建物の狭い横を通って、年月が経って苔むし角が丸くなった砂岩の石段を上がる。雑木が茂りうす暗い。数体の、赤い前掛けをしたお地蔵さまが並んでいる。御仏のご加護ある場所だからそんなことを思っはいけないのだが正直、何となくうす気味悪く感じる。相方はさっさと進んでいく（この人は気味悪いとか感じないのだろうなあ）。細い坂道の登りになった。両脇は背の高い木々が縦横に枝を伸ばしその葉で日光を遮って気温も少し低くなっている。

我々が通っている道より少し広く明るい参道が左側に木々の間から時々見える。

「ここは古い参道ばいね」、縦 1.5メートル横 50センチくらいのやや大き目の石を敷いた、古く細い石畳が続いて風情がある。「ねっ、この石畳も撮っとったほうがいいんじゃないか」と私が言うと先を行く相方は「まるで墓石のようですね」と言ったきり進んで行く。（そがんこと言うか〜）急いで後を追う。

4〜50段あるかと思う急な階段を上るとパッと視界が開けた。本堂と大きな三重塔が見えた。本堂の正面脇に大日如来像、三重塔の前に不動明王像がある。

「いや、すごい大きいね」

「三重塔では日本最大だそうです」

「ほう、そうね」

（やっぱり詳しい）

帰りは私の希望により新しい明るい参道から戻りました。

「最教寺」

真言宗智山派の仏教寺院。山号は高野山。本尊は虚空蔵菩薩像。「西の高野山」とも称される。約3万坪のもの境内に国指定の重要文化財「絹本着色仏涅槃図」他、鎮信以来、歴代平戸藩主の松浦氏から奉納された品々等の寺宝を霊宝館に展示している。高さ33.5mの三重塔(平成元年建立)は三重塔としては日本最大級。長崎県平戸市岩の上町1206-1

九州八十八か所霊場 77番

伝承によれば、当寺がある場所は日本に真言宗を伝えた空海(弘法大師)が唐か

ら帰国して初めて護摩を焚いたところと言われ、真言宗に帰依していた鎮信はこの地に寺院の建立を思い立った。しかし、当時この場所には曹洞宗の勝音院という寺院があり、鎮信は移転を要望したが住職の竜吞はこれを拒否し、最終的に鎮信は勝音院を住職諸共焼き払ってその跡地に最教寺を復興したという。その後、鎮信はしばしば竜吞と弟子の英鉄の霊に悩まされていたがある時当寺に参詣していたところ、赤子の泣き声で亡霊が退散しその後悩まされることがなくなったと言う言い伝えがあり、当寺ではこれを起源とする「子泣き相撲」が毎年2月3日の節分の日に行われている。(ウィキペディア)

お地蔵さまのことをちょっと書いたので、少しだけ…

お地蔵さま…地蔵菩薩は我々庶民的な見方からすれば、優しい仏様です。仏様はみんな優しいのですが特にそんな印象を受けます。

地蔵菩薩は仏教の信仰対象である菩薩の一尊。

サンスクリット語でクシティガルパと言う。クシティは「大地」、ガルパは「胎内」「子宮」の意味で、意識して「地蔵」としている。大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込み、救うところから名付けられたとされる。

日本における民間信仰では道祖神としての性格を持つと共に、「子供の守り神」として信じられており(略)(ウィキペディア)とあります。

ですから、道端に祀られていたり、赤い前掛け(涎掛け)を着けていらっしゃるんですね。我国の浄土教の祖の一人、空也上人の作とされる賽の河原の地蔵菩薩和讃は悲しく胸を打つとともに地蔵菩薩の深い慈悲に涙を誘われます。

仏教への理解とその日本化がこの頃には既に、かなり深まっているように思います。

(県央へ)

この日のメインの目標は「遠藤周作文学館」ですが、途中2~3つの場所へ立ち寄りました。

1つは「楠本端山旧宅」針尾島を西海市方向へ、江上を過ぎ浦頭引揚記念公園入口を右に見ながらそのまま道なりに進むと巨大な三つの無線塔(針尾送信所)が段々近くに見えてくるが、その少し手前で右手に入る。住宅地の細い道に入るが標識もあり比較的分かり易いところにあった。駐車スペースがほとんどないのが難点か。親子三代でボランティアとして旧宅の掃除などの管理をしているという女性の案内で中へ入った。敷地の中では邸宅のあちこちを大工さんたちが修理していた。折からの台風で少し傷んだ部分の改修とのこと。中にいたもう一人の、やはりボランティアで管理をされている年配の男性から聞きまし

た。

先の女性は自分からは何も仰らなかったが、親子三代で世話をされていることは、元市議である、この男性から伺った。

「こがん人のおるけん、保つことの出来とると、助かつとつ」と話された。旧宅は多くの門下生が学んだ、大きな邸宅にもかかわらず、中庭も含めその外観は質素だが格調があり、よく知らない私にも江戸時代の武士のそれらしいと思わせる建物でした。

佐世保が生んだ幕末・明治の儒学者、楠木端山・碩水兄弟は平戸藩士、楠木忠次右衛門の子として端山は 1828 年(文政 11)、碩水は 1832 年(天保 3)に生まれた。

兄弟は幼少の頃、平戸藩藩校維新館に学び、日田の広瀬淡窓と交流し、さらに江戸に留学して佐藤一斉や大橋訥庵に学んだ。

時期は幕末、尊王佐幕、攘夷開国の議論が沸騰する激動の時代に兄弟は藩の向かうべき道を説いた。その後、針尾に鳳鳴書院を開き、後進の指導にあたった。

兄弟の学徳を慕って入門するものは、遠く東北地方に及んだ。

現在残る旧宅は、兄弟の父、養斉(忠次右衛門)が 1832 年(天保 3)に建てたもので、平戸藩士の格式の中に儒学者としての祠堂を備えている。また付近にある楠本家一族の墓地には、墓碑の背後に根回りを石で囲んだ土墳があり、端山・碩水兄弟のものを含む 7 基が県内唯一の儒教様式の墓として極めて貴重である。

(九州地区市町村文化財保存整備協議会「佐世保市の文化財」より)

遠目に見ても高く大きいのはすぐ分かる。しかし、段々と近づくとつれ改めで車窓から見上げると、その異様と威容に圧迫感を感じる。旧佐世保無線電信所(針尾送信所)、「ニイタカヤマノボレ 1208」真珠湾攻撃の暗号はここからも送信されたと言われている。

「なんか怖いくらいデカイね」高さもだが、近くで見るとその下の方の胴回りが凄いとしか言いようがない。

基底部の直径は 12m。高さは 136m。その巨大な塔が 1 辺 300m の正三角形に配置されている。1922 年(大正 11)海軍により建設された。

私が初めて遠くからだがこの無線塔を見たのは、もう半世紀近く前になる。高校の時針尾に住む同級生のバイクの後ろに乗って、やはり此処から太平洋戦争の開始を告げる暗号が飛ばされたのだと、その同級生から教えてもらった。その時だった、「あれはもうすぐ壊されるとばい。解体の計画があるらしい」と言った。それが本当だったかは今は分からないが、同級生は「倒壊の危険があるってさ」とも言ったことを憶えている。「もったいなかつちやなか？これだけの

もの」そんな会話だった。

現在、国指定の重要文化財。凡そ 100 年近く前、当時の鉄筋コンクリート構造物建設の最高技術を伝えている。今でもヒビ 1 つ入っていないとも聞く。

西海橋を渡り大瀬戸方向へ山中を進むと琴海町の海や島々を時々見ながら歩くこと約 10 分、「伊佐ノ浦公園」に到着。

当社配車室には米海軍佐世保基地に従事する兵士や軍属、またその家族からタクシー依頼の電話が多い。大抵は基地と居住地の市内近辺だが、周辺の人気スポットとしてこの伊佐ノ浦公園がある。キャンプやバーベキューを楽しんでいる。コロナの影響で最近はかなり減っているが以前は年中をとおして行っていた。

「ほう、ここはまたキレイな所たい」

「ここも、見せたかったんですよ。なんか日本でないみたいっていうか、欧米の湖畔のようでしょ。だからですかね米軍基地関係の外国人から電話が多いのは」

この日は日本人行楽客がたくさんいました。キャンプサイトにはいくつものテントやキャンピングカーがいて、昼時だったので親子連れが食事などしている。もちろん外国人たちもいました。

「伊佐ノ浦コテージ・バンガロー(宿泊予約専用)」

TEL0959-37-9511

「伊佐ノ浦公園交流センター」

西海市西海町中浦南郷 1133-48

TEL0959-32-9087

伊佐ノ浦公園から車で走ること約 10 分、七ツ釜鍾乳洞のすぐ近くに「中浦ジュリアン記念公園」がありました。住宅地の中にある小さな公園で近づいてから探し回りました。史料館は無人で、勝手に入ることが出来ます。史料館の屋上は展望台になっており、そこに中浦ジュリアンの像がすぐ近くの海、それは遠くローマの方角を指しています。

天正遣欧使節団は 1582 年(天正 10)に伊東マンショ(主席)・千々石ンミゲル(正使)・中浦ジュリアン(副使)・原マルティノ(副使)の 4 人の少年を中心とした使節団。派遣当時の 4 人の年齢は 13~14 歳であった。中浦ジュリアンが最年長、原マルティノが最年少と言われる。1590 年(天正 18)に帰国。彼らの持ち帰ったグーテンベルク印刷機によって日本語書物の活版印刷が初めて行われキリシタン版と呼ばれている。

ローマへ向かった使節たちはローマ教皇・グレゴリウス 13 世と謁見した。ジュリアンは伝染病である三日熱にかかっていたが、皆の勧めを押し切って謁見に挑んだ。(ウィキペディア)

因みに、この使節団は、遠藤周作さんの小説「沈黙」にも登場するイエズス会のアレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父の発案だった。また彼は、この使節団に同伴したとも言われる。

中浦ジュリアンは 1568 年(永禄 11)頃～1633 年 10 月 21 日(寛永 10 年 9 月 20 日)現在の西海市に生まれた。ジュリアンは洗礼名。帰国後イエズス会士で司祭となった。

禁教によりキリシタン弾圧下の中殉教覚悟で地下に潜伏することを選び、九州を回りながら迫害に苦しむキリシタンたちを慰めていた。二十数年にわたり地下活動を続けていたが、1632 年(寛永 9)ついに小倉で捕縛され、長崎へ送られた。そして翌 1633 年 10 月 18 日(寛永 10 年 9 月 17 日)他の 4 人の司祭と 3 人の修道士とともに穴吊るしの刑に処せられた。刑に処せられて 4 日目の 10 月 21 日(9 月 20 日)に棄教せずに殉教した。65 歳であった。役人に対し毅然として「わたしはローマに赴いた中浦ジュリアン神父である」と最後に言い残したといわれている。(同)

この受刑者の中の 1 人に、小説「沈黙」において主人公ロドリゴが同僚の司祭ガルペと共に、その不明である消息を確かめるために日本へ渡ることを決意させた小説上の彼らの師である司祭クリストヴァン・フェレイラがいました。

史料館には中浦ジュリアンの言葉も展示してありますが、その中の一つ、

「この大きな苦しみは神の愛のため」
息を引き取る最後の言葉と書かれています。

中浦ジュリアン記念公園(史料館)

西海市西海町中浦南郷 2048 番地

大瀬戸を過ぎ青、白、赤の橋(ド・ロ神父に因みその出身国であるフランスの国旗の色にしてある)を渡りながら海沿いの国道 202 号線を遠藤周作文学館へと目指す。

晴天で風もない。外海の手も今日は静かなのだろうか、見慣れた大村湾の内海とはやはり藍さが違う。深くて荒々しい海に見える。

「やっぱり外海は違うね。広くて力強い感じがする」遠く角力灘の向うに烏帽子のような形の奇岩の島、兄弟島が黒く見える。

どこまでも青い空と海、ドライブには最高の日和だ。雲一つない空と、どこま

でも青い海の唯一の境目は、ただスーッとその合い中に直線を鉛筆で薄く引いたような水平線。そんな風景の見えるところに「遠藤周作文学館」がありました。空に1つパラグライダーが静止したように浮いている。

受付で、写真を撮らせてもらっても良いですかと尋ねると、管内の写真撮影はお断りしていますとのこと。そこで、あのラミネートの通行手形で説明すると、管理者の男性が奥から現れて、著作権等の問題がありまして、作家の原稿など文字が読めるようには撮らないで頂ければ、良いですよと許しを頂いた。景色のよさや広い館内の展示物等に誘われ相方と私は離れて別々に見て回っていました。

「人生と生活は違う」

と言う言葉が目飛び込んできました。普通だったら私はそんな言葉はあんまり気にしない。目に入らないというべきか。ただこの日は立ち止まってしまった。

生活の失敗が、そのまま人生の失敗ではないという文字もあったと思う。記憶のままに書いているので言葉(細かな表現)は少し違うかもしれませんがそう覚えています。私は還暦も過ぎたというのに、未だに家族に経済的心配をかけ続けている。申し訳ないという気持ちが段々と大きくなっている。今まで自分は何をしてきたのかと、これまで考えたことない思いが最近出てきたりする。

あるとき、友人らと酒を飲みながら冗談で「つまらん人生だった」笑いながら言った瞬間心の中でゾツとした。自分で口にする言葉ではないと後悔した。

だからでしょうか、遠藤さんが何を言おうとしているのかは何も知らないままに、それでもどこか癒されたのです。

遠藤周作さんはキリスト教文学者として人間、人生、宗教そして日本人と信仰について思索しながら仕事をされた。そのなかで「沈黙」という小説も生まれた。どんなに弾圧されても信仰を守り続ける名もなき人々。時には弾圧に屈して棄教しそれに苦しむ人々。人々とは多くが当時の貧しい村々の農民であり、漁民たち。この人らにとって信仰とはなんだったのか？この人らの苦しい、弾圧と生活の中に人生の灯火は…。遠藤さん自身大きな病気もされ数度の手術を受けて自分の人生についての考えにも転機があったとのこと。そういう遠藤周作さんの言葉は、単なる名言・箴言というより彼のたどり着いた哲学的理論に裏打ちされたような言葉に思えました。

ところで「沈黙」は実におもしろい。引きつけられます。と言っても今から40数年前、高校生のとき初めて読んだ時は、最後まで読んだとは記憶していますが、よく憶えていませんでした。気持ち悪くて何度も中断しながら読んだことは憶えています。ただ、主人公祭ロドリゴが踏絵を踏もうと苦しんでいるとき「踏むがいい。お前の足の痛さを私が一番よく知っている。踏むがいい。私

はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かつため十字架を背負ったのだから」と声を聞いたシーンの「踏むがいい。踏むがいい」のその部分だけは憶えていました。

ところが、今回このステップアップ事業の資料の1つとして読み返すと、年取った分感受性が鈍ったのか、出だしのまえがきからおもしろい。まるでミステリー小説を読むように、また、歴史小説を読むようなおもしろさがあります。しかし、よく読んで行くうちに、これは純粋なキリスト教小説(文学)であることが分かりました。この小説では、なぜ日本がそれほどまでに激しい禁教政策を布いたのかほとんど語られていません。にも拘わらず、読む者に余り疑問を持たせずに引き込んでゆくのは、これが宗教文学であり思考を弾圧と信仰、または神とは、という宗教的問題に向かわせるように書かれているからだと思いません。

キリスト教については何も知らないので語ることはできませんが、日本の宗教的土壌とうか、文化的(特に宗教的)なものを外部から取り入れたときの日本化、言い換えると「別のものにしてしまう」ということについては、芥川龍之介もいち早く指摘した一人でしょう。短編「煙草と悪魔」、「神々の微小」によく見て取れます。昔の人が来日した伴天連たちの行動を本当にそう表現したかどうかは知りませんが、小説的表現の技法として、フランシスコ・ザビエルのことをフランシス上人と書き、伴天連たちの言動や祈りを「勤行」や「祈祷」、デウスを「南無大慈大悲泥烏須(デウス)如来」と呼ばせ既成のように違和感を和らげている。内容的には、「神々の微小」で、どこからともなく現われたこの国の霊の一人という老人が主人公オルガンティノ司祭に本地垂跡(ほんじすいじゃく)の教えを聞かせこの国に来た仏教も含め宗教や哲学が八百万の神々と同化(日本化)し別のものになることを説いている。

本地垂跡はしばらく置くとして、確かに仏教の思想の1つ「一切衆生悉有仏性」の本覚論も、全てのものに精霊が宿るという日本独自のアニミズムによって理解、受入れされたように思う。正月に道具を休ませる神道的風習に通じる。日本仏教が大好きな私にとってはそれで良いのではないかと思うのだが、キリスト教では違うのだろうか。

遠藤周作さんの書いたものを少しですが読むと、誤解だとお叱りを受けることを覚悟で感想を申せば、評伝「イエスの生涯」や「キリストの誕生」にしてもある意味非常に日本的なキリスト教解釈があるのではないか?少なくとも我々日本人には受け入れやすい。「沈黙」における神の沈黙と存在あるいは存在の仕方に対する葛藤そのものの中に遠藤周作さんの文学が立脚しているようにも思います。そんなことを考えながら文学館で展示品を眺めていたら15分の予定が1時間近くなってしまった。さて、相方はどうしているかと外に出たら、相方も外にいて、「あ

のパラシュートずっと降りて来ないんですよ」と入る時に見えたパラグライダーを指して言うので「あれは操縦している人が降りようと思うまでは降りて来ないよ。あんな高いところから見る景色は、また良かつちやろね、あれ写真撮った？」
「撮りました」

「遠藤周作文学館」

長崎市東出津町 77 番地

Tel.0959-37-6011

「ところで、雲仙、口之津行ってみゅうか」

今回の我々の事業は「県北・県央の観光開発事業」だから、県南は含まれていない。しかし、少しだが潜伏・かくれキリシタンについて本も読んだりして、この「遠藤周作文学館」を見学しているうちに、以前仕事で訪れたことのある口之津へもう一度行って、見てみたいものがありました。島原はキリシタン弾圧が激しくなったはじまりの土地でもある。

「無関係という訳でもなかしね」

「今からですか？…わかりました、よかですよ」

ということで突然ですが島原口之津へ行くことになりました。

(島原へ)

千々石の峠を下り始めると、小浜の温泉街が見えてきた。その小浜を通り過ぎ、海岸沿いを口之津に向かう。もうすぐもうすぐと思いながら、国道 251 号線に行く。右手に奇岩双子岩(通称 岸信介岩)を遠くに見ながらいくつかの覆道を潜りやっと目的地へ着いた。「口之津歴史民俗資料館」は口之津港の片隅に車 1 台しか通れない不思議な赤いアーチ橋の袂にあった。洋館づくりの建物は岸壁にひっそりと建っていました。アーチ橋の真下に数隻の漁船が碇泊している。夕暮れが近い。思いつきで来てしまったのがいけなかった。着いた時には閉館時間を過ぎていました。相方は史料館の外観や周囲を撮影している。

「ごめん、やっぱり無理やったかな。今度もう一度来て良いやろか？」

「はい、今度は原城なんかも見に行きましょう」

有難い返事だった。帰りの道すがら眺めた橘湾に沈む夕日がきれいだった。

相方は早速車を停めて夕陽を写真に撮っていました。

(長崎を廻り島原へ)

という事で、日を改めて口之津へ出発。この前の失敗を教訓に午前 8 時半に会社を出ました。今回は大村廻りで向かいました。

「やっぱりさ、長崎にも寄ってみようか…」

「えっ、時間ありますかね？」

「平和公園の平和像くらい撮っておこう。報告書の表紙に使おう」

今回の事業では長崎市とハウステンボスは敢えて外していたのです。理由は、この二つは我々よりも全国の観光客の方が良く知っている。我々の出る幕はないと考えたからです。私たち二人とは別行動を取っている、今回事業の中心的役割をしている向(むこう)は、先に長崎に行ってみてその観光資源の多さと、タクシー観光を行っている長崎のタクシーに乗ってみて「資源も人も全くかきません、取り組んでいる組織も歴史も違います」と言って、彼自身の計画を変更したくらいだったからです。

平和公園に着くと観光客の人々がある程度いました。中には修学旅行と思われる小学生の集団がいて、平和像の前に間隔を1人分づつくらい開けて体育座りをして、フェイスシールドやマスクをしている先生の説明を聞いている。

「よくこの時期来れましたね」と相方「親御さんたちの理解があったんだろうね」と私。

もう相方は平和像の写真を撮り続けている。あなたは写真が上手だねと言うと「そうですか、全く関心ありません。でも撮るからには良いものを…、パンフに余りない角度で撮りたいのですが、天気がですね〜…」この日は台風が近づいており雨も心配だった。

「ほう…。(それが写真好きのように思えるのだがと思ったが言わなかった)」相方は時間が心配と言いながら、平和の泉とか各国から贈られたモニュメントなども撮っていた。

その風景を見ながら私は母のことを思い出していました。

「ピカッと真っ赤に、目の前も周りも全体に光って、あがんことは初めてやったし、後もなか。そのあとドーンって爆風が来て。うちゃ思わずナムダイヘンショウコンゴウって目ばつむって手ば合わせとったよ。少ししたら静かになって周りが明るうなったけん。手を合わせたままそーっと上ば見たら三階の屋根がなかったと」その時母は勤めていた旅館の二階と三階の間の踊り場で掃除をしていた。私の母は大正10年、天草で三男四女7人兄妹の二女として生まれた。原爆投下のあった頃は実家を天草に残したままで、長崎に母の父親と二人で家を建てていたので両親と何人かの兄妹も長崎に来ていた。3部屋ある二階には長崎大学医学部の学生を2〜3人下宿させていたらしい。

「今んとはね、艦砲射撃よっ」無事だった同僚の女性が興奮した口調で言ってきた。物知りで同僚たちに一目置かれていたその女性も新型爆弾のことはまだ知らなかったようだ。また、暫くすると助かった人たちがぞろぞろと壊れかかっ

た建物から出てきて、煤だらけの顔で「おめでとうございます」「おめでとうございます」と口々に言っていたそうです。

「なんがおめでたかったちやろね、生きとったからやろうかね。空には敵機がぐるぐる廻りよったよ」

「あら、あなた足ばけがしとったい」母は割れたガラスの破片で片方の脛を怪我して血が流れていたが言われるまで気付かなかった。

階下の外を見ると一人の浴衣姿の男性客がぼーっと池を見つめていたのを憶えているとも言っていた。

原爆投下の前日頃のことと話す。母は近所の人と防空壕の中にいた。一人の学生が「悔しいではありませんか皆さん」と一枚の紙切れを持ってきて見せた。こんなものがまかれています。紙には、皆さんはもう広島の話は聞いているでしょう。今度また熱いお土産を持って来ますと書かれていたそうです。防空壕の中には佐世保から来た子供さんを連れた若い母親もいたそうです。長崎の港に着くご主人に会いに来たと言っていたそうですが、その紙を見て若い母親は、佐世保でもこんなビラがまかれ、それから空襲があった。間違いないと言ってご主人に会うことなく佐世保へ帰ったそうです。

「その親子は、それで原爆に合わずにすんだとよ」

諫早から島原に入る。とにかく相方は路を良く知っている。どうしてそんなに知っているのかと聞くと「近くに新しい道路が出来るとそこを運転して見ます。お客さんから聞かれたときに分からんではいけませんから。池田さん(もう一人の営業部長)も同じですよ」それにしては近くと言うには範囲が広いと思いつつ、それを聞いて、同じ小さなタクシー会社にいながら総務とはいえ私の方向音痴が恥ずかしく思えました。タクシードライバーや配車担当の営業部員には頭の下がる思いでした。その他、道中色々なタクシーの苦労話などをきかせてもらった。これも旅の楽しみの一つかと思いました。

「どうぞ何でも撮ってください。宣伝してください」ここでも担当の方に同じことを言われます。私たちの仕事が宣伝になるかどうか…。御好意で撮らせてもらった写真や、パンフなどは出来るだけホームページで紹介しようと思いました。

口之津は三井三池炭鉱の石炭積出港として大いに栄えた。しかし、三池内港が出来てから衰退した。栄えていたころ、その石炭船に石炭と一緒に載せられて「からゆきさん」たちは連れて行かれたのです。

「天草もそうですけどね、こちらの女性たちは石炭といっしょに載せられて連れて行かれたんです。それがねえかわいそうで」私たちのほかに誰もいない「口

之津歴史民俗資料館」の館内を付きっきりの状態で担当の男性が説明してくれた。

確かこの入口の上に、からゆきさんたちの大きな写真が以前あったと記憶しているが今はありませんねとの私の質問に、新しい新館が出来たのでだいぶあちらへ移されているのですが、それは新館にもないと思います。「からゆきさん」の資料は少し整理されました。来館者の皆さんの中には、可哀そうで見たくないとか、人権の問題を言われる方もおりますので…との答えだった。確かにそれはあるかもしれない。しかし、江戸時代この土地の人々は天草といっしょにキリシタン禁教の弾圧で苦しみ、近代になってはまた天草と並び「からゆきさん」の苦しく悲しい歴史を持つ。その負の歴史についても現代や未来の人間は我々庶民レベルで忘れてはならない教訓でもあるはずです。

え…早よ寝ろ泣かんでオロロンばい 鬼の池ん(おんのいけん)久助(きゅうすけ)
どんの連れんこらるばい(作詞・作曲 宮崎康平)

鬼池(おんのいけ)は天草にある地名、早崎瀬戸を挟んで対岸に島原口之津がある。鬼池の久助とはその鬼池の女衞。

以前来たときこの辺りの村でほとんどの村民がキリシタンとして処刑されたと展示の年表にありましたが、その説明板もなくなっていますねと聞くと、「そうですね整理したときどこかに行ったんでしょう。しかしこの辺の村は全てですよ。殺されてしまっています」

「ここに来るとき海の向こうに天草が見えました。この海を渡って合流し一揆の農民たちが原城に集結したのだらうと思いながら来ました」というと、そうですと言いながら地図のあるところへ案内し富岡などを指して「この辺りの人々がこう渡ってきたのです」と説明を受けた。また、

「一揆の総勢は約 37,000 人だったといわれていますが女性や子供も多くいて実際に戦闘能力があったのは 17,000 人くらいではなかったかともいわれています。それに対して幕府の武士たちは 12 万くらいだったようです。激しい戦いだったようですね…」と説明。

「全滅だったとか？」

「はい、山田右衛門作という一人だけが生き残っています」

山田右衛門作(やまだ えもさく)は幕府方に内通していた。

「江戸時代初期に起こった島原の乱は、日本の歴史上最大規模の一揆であり、幕末以前では最後の本格的内戦である。島原・天草の乱、島原・天草一揆とも呼ばれる。キリシタンの間でカリスマ的な人気を得ていた当時 16 歳の少年天草

四郎(本名益田四郎時貞)を総大将と決め、寛永 14 年 10 月 25 日(1637 年 12 月 11 日)勃発、寛永 15 年 2 月 28 日(1638 年 4 月 12 日)終結とされる。従来、信仰的側面は表面上のもので、あくまで厳しい収奪に反発した一揆であるというのが定説であったが、事態の推移から、単なる一揆とする説明がつかず、宗教的な反乱という側面を再評価する説が出ている。鎮圧の 1 年半後にはポルトガル人が日本から追放され、いわゆる「鎖国」が始まった。」(ウィキペディア)

「この一揆に対し、その形態・分類にはいろんな説があり、見方も変わったりしています。百姓一揆に分類する説が有力のようです」とは担当の方。

余談ですが、島原の乱には、剣豪宮本武蔵も出陣しています。飛んできた石が足に当たって怪我をし、余り活躍はしていないようです。

この乱以後、幕府のキリシタンに対する弾圧は激しさを増して行くこととなったのです。

担当の男性から聞いた新館にも行きましたが、私がもう一度見たかったものは展示されていませんでした。以前にはカブラペンのようなもので、きれいな英文で記帳された三井三池の商船の帳簿類もありませんでした。

それから、私たちが行った旧館が、分館となり、新館が本館になっていました。

「南島原市口之津歴史民俗資料館」

(本館)南島原市口之津町丙 4358 番地 6

(分館)南島原市口之津町甲 16 番地 7

小雨が少しぱらつき出した頃、原城跡に着きました。海に面した起伏のある広い原っぱ。現在を一言でいえばそんな感じですが、所々にある 1~3m の石垣が城跡であることを物語る。ここが日本史上最大の一揆と言われた激戦の舞台かと緊張のようなものを感じました。

確かに広い城跡だが、此処に 3 万 7 千人が籠城したとなると果して広くはなかったのではないかと思いました。3 万 7 千の多くの人々が一カ所に籠城すれば密集的になってはいなかったらろうか？想像ですが、人々はそんな中で高揚して行ったかもしれない。一揆の指導者達には浪人も多く居たとのことで、軍隊としての組織化も為されていたかもしれないが、大多数は農民や漁民たち。女性や子供たちもいた。作っても食したことのなかったかもしれない米を、ここでは少しでも自分たちの口にすることが出来ただらうか？過酷な年貢からの解放を夢見ることが出来ただらうか？そんなことも思いました。一揆の兵糧が尽きたと分かったとき、幕府軍は総攻撃に出たとのこと。

一番上にある石垣の上の広場に、指を組み天を仰ぎ、祈る姿の天草四郎時貞の像が立っていました。

「1992年に始まった原城跡の発掘調査で、本丸跡ではキリストや聖母マリアなどを刻んだメダイ(メダル)や、ロザリオの玉、鉛の銃弾を溶かして作った十字架など信仰用具が多く出土した。一揆軍が最後まで身に着けていたものだ。正門付近では一揆軍の人骨が大量に見つかった。骨の状態から、幕府軍が首や足を切って容赦なく殺害したことが裏付けられた。幕府軍は一揆軍の遺体を通路に集め両側の石垣を崩して巨石を落とし、その上に土をかぶせて完全に封印していた。

一揆軍はキリシタンの祈りを唱和してから戦っていた。原城からは常に讚美歌や祈りの声が聞こえていただろう。落城の際には、笑顔で炎の中に飛び込む子どももいたという。(略)

「永遠の命」を求めた民衆のけなげな信仰も、権力者から見れば「狂信的な反体制思想」となる。島原の乱で衝撃を受けた幕府は、鎖国と禁教の政策を一層強化した。」(「祈りの記憶 長崎と天草地方の潜伏キリシタンの世界」松尾 潤 著 批評社より)

「キリシタン弾圧」や「からゆきさん」を遠い昔の断絶した歴史と考えるはならない。このような人々の血や涙が、人間の平等や平和の尊さを人類に発見させ、少しずつ現在の平和の価値観を実現して来たのだと思う。

古来より戦争、飢え、病の三つが人類を苦しませてきたといわれる。

我国は今、平和の中に暮らしているが、世界のニュースを見たり聞いたりすると現代もそれに苦しむ人々が依然多く存在することが分かる。

21世紀は始まったばかりだが、世界は今、大きな岐路に立たされている。民主主義が試練の中にあり、温暖化に代表される、進む環境破壊は地球規模の飢饉を産むかもしれない。そして現在世界中を新型コロナウイルス感染症という病が蔓延し世界の政治経済に甚大な影響を及ぼしている。

「原城跡」

南島原市南有馬町

Tel.0957-73-6706

忘れていたが、あの五人はどうしていたでしょうか。

佐世保から平戸に渡った五人は長崎へと県を縦断し、茂木から千々石湾(橘湾)を渡って天草の富岡、天草、大江、牛深と進み一旦熊本本土宇土半島の先端三角港から再び島原に戻り、島原から熊本長洲へと長崎県を離れています。

同じく長崎県を縦断しているのだから、我々と重なる所があるのは当然(我々は

島原まで)ですが、五足の靴も何とキリシタンや島原・天草の乱に関心を寄せ(天草大江村では「パーテルさん(神父さん)は何処にいる」と大江天主堂や天草一揆のことを訪ね)ています。

我々は当初潜伏キリシタン等は考えになかったのですが、平戸の教会やら、外海東出津町の『遠藤周作文学館』を廻るうちに、潜伏・隠れキリシタン等にも関心を持ち始めたのですが、『五足の靴』はメンバーの一人太田正雄(木下杢太郎)が発前前から切支丹の文献を調べ、九州に入ってから、彼が行き先をけん引した(同上解説)とのことで、テーマに於いても、やはり少し重なったようです。

「三角から島原へ行く海路の景色は今日まで見た自然の中で最も美しいものであった。紺青の雲泉ヶ嶽(うんぜんがたけ)が西の方行く手に聳え、日はその上にかかる、空の色、海の色刻々に移り行くを眺めて夢のような心になる。日が沈む、海が紅に燃えた。島多き島原へ着いた、真黒な眉山が港を脅かしている、いい所だ。…」(「五足の靴」岩波文庫より)

「この城を見るものは、誰でも第一に天草四郎のことを想起すに違いない。ここは彼が最後に拠って終に滅んだ所である。殊にその戦歿の時が十七歳であると聞いては、何故ともなく一種悲壮の感に打たれる。この一揆の起因はとにかく、これが盟主となった少年彼の動機、その心理等に至っては、旧記の載する所甚だ尠く、かえって後人の自由なる忖度の余地を残してある。自分は天草四郎の事跡には既に成心を持っている。始めはただ想像に過ぎなかったが、今は必然そうなくてはならなかった事実のように思われて来た。自分は天草四郎を一の天才と見るに躊躇せぬ。…(略)…」(同)

ただ、この本の解説「踏みこそ鳴らせ、大靴を」宗像和重著に依れば、五人は島原城跡と原城跡を間違っていたとのこと。

長崎のことについては熊本を訪れてから、

「…(略)こんな事を考えながら、名も知らぬ石橋を渡ろうとした時、M生は突然、『実に長崎に似ているなあ。』と叫んだ。多くの氷水の露店が並んでいる辺、川の面に夕暮の残光が落ちかかっている辺、洋館めいた家が立っている辺、一寸髣髴としてその面影を忍ぶ事が出来る。長崎、長崎、あの慕かしい土地を何故一日で離れたろう。顧みていい知らず残り惜しい。」

と綴っています。

我々は少し足を延ばし『鯉の泳ぐまち』へ行ってみました。武家屋敷の通り。石畳の路の両脇に細い水路があり、足元を美しい水の流れの中に鯉が泳いでいました。そんな町の中に学校もあり中学生らしい生徒たちが通りを下校してい

ました。情緒豊かな町をほんの少し楽しませて頂きました。

(佐世保)

土曜日のある朝、その日予定していた資料を読んでいた私に、突然相方が烏帽子岳や弓張岳に登って見ましようと言う。晴れてもいるし良い日和かと行くことにしました。

平成3年に出版された佐世保市秘書課広報係監修の『させぼ歴史散歩』に、「佐世保市街の東の方に秀麗な姿を見せている烏帽子岳は、標高五六八メートル、古くは東風蔵岳(こちくらだけ)と呼ばれ、俗に佐世保富士と呼ばれて昔から佐世保の人たちが象徴として仰ぎ見てきた山である。…(略)…佐世保駅を出た観光バスは山すそから蛇行しながら登り、田代～満場をへておよそ五十分で終点につく。この間、溪流あり、森林あり、そして山頂近くは広い台地になっていて、湖水あり、キャンプ場あり、青少年の天地のスマートな建物がある。…(略)…すぐそばにある展望台に立つと、眼下に色どりも鮮やかな佐世保市街が、緑の山をバックに、形美しいびわの海を前に絵のように見える。西海橋の向こうに広がる琴の海、九十九島のかなたには平戸島や五島列島も見える。ここはまさしく西海国立公園を大観できる絶好の場所で「美しき天然」の名曲が生まれたのも、むべなるかなと思わせる。」(昭45・1 No56)(編集・発行所 芸文堂)とあります。短くて簡潔、端的でありながら、その美しい風景と特徴を読むだけで髣髴とさせる良い文章であり、烏帽子岳についてはほぼ言い尽くされているように思うのですが、レポートを作成する身にとっては、誰かの書かれた文章を写して紹介するだけでは芸がなさすぎるので、もう少し補足します。

この文章は(昭45・1)となっていますので昭和45年1月に当時の佐世保市の広報誌『させぼ市政だより(現在の『広報させぼ』)』に当初掲載されたものようですから半世紀前の執筆となります。

烏帽子岳に当時はなかった施設として「えぼしスポーツの里」があります。木風・山祇町方向(バス路線で言うと山手町方向)から登ると、頂上への道を登らずにまっすぐ過ぎ、青少年の天地を右手に見ながら、黒髪町方向へ小さいけれど林に囲まれたきれいな湖を過ぎて、天地から車で2分くらいの所に、けっこう広い敷地につくられています。(えぼし岳高原スポーツの里)

中に「おもしろ自転車」、「ゴーカート」、「ボールプール」、「ソリゲレンデ」等があり、「森のレストラン」、「バーベキューハウス」もあって親子で楽しめる施設になっています。また各種イベントが開催されたりしています。この日は、やはり新型コロナウイルスの影響で来所者はまばらで静かでした。例年なら夏休み中で多くの親子で賑わっている頃なので残念なことと思いました。

また、青少年の天地も、施設は前述された頃より拡充されており、自然環境の中で宿泊生活を通して様々な自然体験活動を行い、豊かな人間性の育成を目的に設立された社会教育施設とあります。佐世保では夏休みなど人気の高いスポットで、例年であれば半年以上前から予約でいっぱいになっています。4回建ての、全ての活動の拠点となる本館、別館となるロッジ棟、更にケビン、夏休み期間中のみ利用可能なテント等の施設があります。詳しくは青少年の天地公式サイトをご覧ください。

長崎県立青少年の天地

〒857-0001 長崎県佐世保市烏帽子町 376

TEL0956-23-9616

えぼしスポーツの里

〒857-0001

佐世保市烏帽子町 128

TEL0956-24-6669

(運営) ビオトピアえぼし有限責任事業組合

烏帽子岳頂上の下に原っぱがあります。私の子供の頃は「ばんばか原」と呼んでいました(現在は「風と星の広場」となり大きな展望台が建てられている)。小・中・高の遠足のときなどは、そのばんばか原で昼食(弁当)をしました。記憶では、ばんばか原から頂上はすぐそこで、原っぱからそのまま頂上まで駆け上がる事が出来たように思っていました。今回来てみると間に雑木林が茂り遮っていました。頂上へは横の階段や坂道のルートをのぼるようになっていました。頂上も様子が違って、昔は土と草々に、大きな岩(溶岩)がいくつもあっただけだったと記憶していましたが今は足元はコンクリートが敷かれています。ただ、頂上からの眺望は前述の本のとおり昔と変わりなく佐世保市街地など一望できます。

前回この頂上に来たのはもう40年以上も前、高校生の頃とばかり思っていたが、頂上から眺めているうち、そうではなく、30年ほど前に一度来たことを思い出しました。そのとき、私とは関係のない団体の登山者たちがいて、その内の一人が岩の上に立って説明をしていた。そのなかで、西南の方向を棒で指して「ほら、あちらを見てください、遠くに白く細い煙の筋が見えるでしょう」

私も棒の指す方を見ると、薄い霧の向こうに確かに本当に小さく垂直に伸びる白い糸のような煙の筋が見えた。煙の上の方は横に流れている。

「あれが、この前噴火した雲仙岳です」

思わず、へーっ、雲仙が見えるのか、と驚いて呟いたことを思い出しました。

頂上には 4 柱の石の御神体と一棟の祠が祀ってありました。そのうちの一柱に猿田彦神の御神体がありました。おや、此処にもお祀りしてあったのかと思いました。天孫降臨の際に、天照大神に遣わされたニニギノミコトを道案内した国津神と伝えられる。私は神道について全く知識がないのですが、猿田彦という名には、なんとなく親しみのようなものを感じています。理由は単純で、私の尊敬する漫画家手塚治虫さんのマンガによく登場するキャラクターの一つだからです。

猿田博士の他、別の名前でも登場するが容貌は同じキャラクターで、手塚治虫さんのライフワークといわれた「火の鳥」シリーズにクセのある人物として様々なかたちで登場します。

中でも、手塚マンガの最高傑作といわれる火の鳥「鳳凰編」の主人公、手塚マンガで猿田彦のイメージである我王（がおう）の物語は、中学 1 年生のときに読んで忘れられない感動を覚えました。東大寺大仏殿建立の為、諸国を行脚していた良弁僧正は、盗賊の我王と巡り合い一緒に旅を続けるようになる。そのうちに良弁は、我王の彫り物師(仏師)としての天才を見出す。

不幸な幼少時代の我王が盗賊となり、速魚という不思議な女性との出会いと短い愛の生活の中、波魚を自らの手で失い、彼女の正体を知る。悲しみと後悔の放浪の中での良弁との出会い、師弟となつての旅、そして師との突然の別れ。また、盗賊だった頃の我王から利き腕を傷付けられ仏師としての危機に陥りながらも、たった一人で生きてきた少女プチとの出会いとその無垢な愛などから、もう片方の腕で立ち直り、我王のライバルとなる、もう一人の天才茜丸の物語と重なりながら流れ、都での再会とクライマックス。発表当時ではマンガとは思えない壮大なドラマです。

しかもまた、吹き出しの中のセリフの難しい漢字にルビが振っていない。辞書を引きながらマンガを読むのも初めての経験で、子供心にこれはただのマンガではないと、そんなところにも感動しました。

また、作家の宮崎康平さんは猿田彦神について、その著書の中でこう紹介しています。

「町や村の辻、橋のたもと、道端、九州ならどこにでも見かける猿田彦。自然石のものもあれば、粗面をみがいたものもあり、文字は彦、毘古などあってまちまちである。なかには、さしかけ程度の庇があるものもあるが、風雨にさらされている。

だが、荒れはてた社、雑草の生い茂った境内に朽ち果てて祀る者もない他の神の祠はあっても、この猿田彦に、苔むしたといった感じで放置されているものをめったに見たことがない。どんな村はずれの猿田彦でも、山の中の猿田彦でも、誰が掃除するのかいつもきれいで、誰があげたのだろう、ときには野花や水が供えてあって、いつ、誰がするのか、それさえもわからない。…(略)…

いつも道端に立って静かに見つめる猿田彦。そこに供えられる野花や水には、ふるさとの心がこもっている。…(略)

祀る者と祀られる者が一対一でつねに心が通い、そこには煩わしい形式もなければこけおどしのいかめしい威圧もない。ただ手をあわせて拝めばいいのである。第一、代償を求めようとする賽銭箱がない。…(略)

庶民にとって、つつがない毎日を感謝し、無病息災を祈り、心のやすらぎを求め、あてにもならぬわが子の行く末を案じては、うれしいや悲しみをじかに訴える場所が手近にあってもいいはずである。猿田彦はそんな神なのだ。…(略…)」(宮崎康平著「神々のふるさと」(講談社)より)

今回車で登っている途中、3人の外国人登山者を見かけましたが、その3人が頂上に登ってきました。そのうちの一人が我々を意識してか、石に腰掛け「暑いーっ」と日本語で声を出しました。相方が「カメラOK?」と聞くと3人は「yeahー」と笑顔で応えてくれました。

さて、頂上から下り、ばんばか原の横に作られた駐車場に戻り、そこに建てられた、烏帽子岳頂上上空を渡る渡り鳥(アカハラダカ・ハチクマ)についての大きな案内板の横に「風と星の広場」の大きな展望台ではなく小さな展望所が作られています。そこで眼下の景色を眺めていると、目の前を1羽のツバメが素早く身を返しながら縦横に飛び回っている。こんな民家などのない高い山中にツバメがいるのかと思いましたが、あんな小さな体でフィリピンや台湾などへ渡るツバメにとってはエサとなる昆虫を探すのに、なんてことはない距離なのでしょう。このツバメが絶滅危惧種になろうとしていると聞きました。確かに最近街中でツバメを見る機会が少なくなっていると思う。特に今年は見ることが減った。私のような素人には生態系へ影響がどうの(大きいのではと心配している)とは分からないが、夏にツバメが1羽もない風景は想像してもなんだか恐ろしく感じます。

さて、烏帽子岳頂上上空を渡る鳥の観察はアカハラダカやハチクマが有名で、私も1度だけ、ばんばか原でアカハラダカの渡りを見たことがあります。烏帽子岳を含め佐世保上空を渡る渡り鳥には、他にツルの渡りが知られています。

ツルの渡りは北帰行がよく話題になりますが、渡来の飛行についてはあまり聞きません。北帰行と同じコースなら10月～11月にかけてニュースになってもよさそうですが、渡来に関しては越冬地の出水市への渡来のニュースが多く佐世保上空での渡来飛行が観察されたというニュースはほとんど聞かないように思います。(まあ、出水に飛来したとなると数時間前に佐世保や長崎県の何処かを通過したと思えばいいのでしょうか…)

ツルが早めにやって来ると、逆に飛び立つのが遅いと言われる。つまり冬が長く寒いらしい。

その北帰行は、佐世保市のホームページによると、佐世保市は2月中旬から3月下旬にかけて、繁殖地へ帰る際にたくさんの数を観察することができるそうです。県内では野茂半島、稲佐山、県民の森、石岳展望台、冷水岳展望台、川内峠、生月島のオオバエ灯台等の上空を通過することが紹介されています。さらに観察のポイントとして「鹿児島県出水市を午前中に飛び立ったツルは、南からの追い風を利用して時速約50～80キロで北へ向かい、韓国南部まで約400キロを1日で飛行します。佐世保市上空の通過時間はおおむね13時～15時頃に多く観察されます。マナズルの渡りは2月中旬から下旬頃、ナベツルの渡りは3月中旬以降に多くみられ、多いときには600羽程度がV字編隊を組み、大声で鳴きながら飛んでいきます。天候や風向きによりますが、遠く九十九島上空や佐世保市街地上空を通過して行くことがあります。」と書いてあります。

2年前の3月はじめ頃の日曜日、時間はお昼頃、庭に出て草むしりか何かしていたと思う。クワッ、クワッ、クワッと聞き慣れない鳥の群れの鳴き声から聞こえる。見上げると5～60羽、いやもっといたかもしれない、たくさんの鳥の群れが飛んでいる。ちょうど我が家と私の真上だった。姿は黒っぽく見えた。上空100メートルくらいの高さだったが、長い首や羽の形で大型の鳥であることは分かった。そのうちの10羽くらいが群れから離れ北東へ向かって飛ぶと、群れが私の真上で旋回し始め、そちらは違うよと鳴きながら呼ぶように何度か円を描いて飛んでいると、先程の10羽くらいが戻ってきて旋回の中に混ざった。私は近くにいた長男を、おーいと呼んで上を指した。「鶴ばい。鶴の渡りばい、見える？」息子は目を細めて見上げながら「見える、見える」と言った。その時は既に群れは先程よりも高く遠くをV字編隊をつくって飛んでいる。

「あの群れの先頭が一番経験のある鳥が先導するらしいよ」と私が言うと、「よう知っとるね」と息子。

「たぶんね。ホントかどうか分かんけど、むかし親父から聞いた。渡り鳥はそうらしいよ。毎年同じ鳥が先頭ってわけはないだろうし、一番端の若い鳥が、

いつか先頭で群れを引っ張る時が来るっっちゃろね。鳥だってそうやって受け継がれていくって考えると、頑張ってるな～って言うか、なんだか涙ぐましくもあるね」

「……………」

「北帰行って言う。実はお父さんも初めて実際に見た。60年生きて初めてばい」

「ホッキコウ…？」

「そう、先ず朝鮮半島に渡り、それからいくつかのルートを経て最終目的地はシベリアまでらしい。北に帰るから北帰行。」

「……………」息子は遠く北西の空に高く消えていく群れを何も言わずに見ていました。

烏帽子岳の頂上やスポーツの里を巡った後、一路弓張岳へと向かいました。標高 364 メートル、佐世保市中心街から見て西側に位置し、南から弓張岳、但馬岳(361メートル)、将冠岳(445メートル)の順に連なっている。烏帽子岳から見て正面より少し右側にあって、その展望台から見る景色は、烏帽子岳とは違った方向から佐世保港、佐世保市街、米海軍佐世保基地、佐世保重工業(S S K)、更に西側には九十九島を見渡す大パノラマが広がる。展望台の屋根のシェル設計は著名な建築デザイナーで東京大学教授でもあった坪井義勝博士(1907年5月～1990年12月 シェル構造(曲面板構造)研究の第一人者)の手による。(ウィキペディア及び佐世保観光ガイドブック(佐世保観光マイスター育成協議会発行)より)

展望台の敷地内周囲には野口雨情の歌碑や藤浦洸の詩碑とそれを見て作曲家團伊玖磨が使用すること決めたと言われる「西海賛歌」の碑などがありました。因みに、この弓張岳展望台を含め、その中腹の鵜渡越展望台、船越展望所、石岳展望台、展海峰展望台(展望所には「美しき天然」を作曲した佐世保海兵団軍楽長、田中穂積の銅像もある)、冷水岳展望台、長串山公園展望所、高島番岳展望台は九十九島八景と称されています。(同)

「鵜渡越に行ってみましょう」と相方が言う。彼が言うのだから何か見るものがあるのだろう。車で下ること2、3分。鵜渡越展望台があった。そして、その横に30段くらいの急な階段があって、それを上がると公園になっていて更に数段ある階段の上に「第四十三号潜水艦殉難碑」がありました。

「これを見たかったんですよ」と相方。彼は元陸上自衛隊員なので、このような碑には関心があるのでしょう。何枚か写真を撮っていました。

「四十三号潜水艦が佐世保鎮守府の基本演習中、軍艦「龍田」と接触して佐世保港外で沈没したのは大正13年(1924)3月19日の朝のことであった。桑島艦長

以下 45 人の乗組員は生きながら海底に閉じ込められた。ただちに救出作業がはじめられた。(…略…)潮流がはげしく、艦は二十尋(一尋は 1.6 メートル)もの深い海底にあった。作業は進まなかった。十数時間後、ついに艦内からの応答は全く絶えた。乗組員全員の息が絶えたのである。(略)(させば歴史散歩 編集芸文堂より)」とあります。沈没事故現場が直接見下ろせる場所としてこの地が選ばれたそうです。

この日、私たちが訪ねたとき我々の他は、殉難碑にも展望台にもだれ一人いませんでした。やはり新型コロナウイルスの影響でしょうか訪れる人がしばらくいないからでしょう、芝生が脛の近くまで伸びていました。展望台からは、弓張岳展望台のように佐世保市街地を見ることは出来ず、見渡す範囲が狭まりますが、九十九島の海が弓張展望台より近くに見えました。「此处も見晴らしが良いですね」と、相方は此处でも早速写真を撮っていました。公園内に設置されたカラーで描かれた案内板の中に親鸞聖人像とあります。階段を下りるとすぐ近くにあるように表示してあるので、私が行ってみようと言いました。車は公園までしか通行できないようでしたのでそこに駐車し、歩いて行くことにしました。

ところが、なかなか着かない。道は舗装されていない狭い登山道。一本道のはずが時々分かれ道のような場所があって 2 度ほど間違っ迷った。もう諦めようかと私が言うと、相方がもう少し行ってみましょうと言う。それもそうだ、聖人像を見たいのは私だったと思い進んでいるうち、雑木林の中にコンクリート造りの休憩所のような建物がありました。説明板には「お野立所」とあります。

前述の「させば歴史散歩」によれば「昭和天皇が二十歳の皇太子殿下時代、初めて佐世保をご訪問の折、九十九島をご鑑賞いただこうと設けられたお野立所なのです。大正 9 年(1920)4 月 3 日、皇太子殿下はお召艦「香取」で洋上から佐世保入りされました。(させば歴史散歩 芸文堂)」とのこと。「…ところが、皇太子殿下ご訪問前の数日間降り続いた雨で、お野立所までの山道がぬかるみ、とても登れない状態だったため、やむなく皇太子殿下のおいでは中止になったのです。殿下は苦心してお野立所を設け、おいでをお待ちしていた佐世保市民の心を思われ、侍従の土屋正直子爵を名代としてお野立所に遣わされました。この殿下の温かい思いやりに「12 万市民は等しく感激した」と当時の記録にあります。(同)」ともあります。

さて、私たちは更に、落ち葉と土、所々に大きな岩がある狭い道の、両脇は滑ると転げ落ちそうな急斜面の登山道を下りました。階段はこれまた所々にあるにはあるのですが、苔むした古い石段で歩き辛く用心して歩かなければいけ

ません。「これは上級者向けピクニックコースですね」と相方。「自衛隊の頃、上官がたまにピクニックに行くぞって言うんです。最初知らない時は喜んでついて行くんですが、こんな山道をずっと歩かされるんです。訓練だったんですね」と言いながら慣れた足取りで下って行きます。

30分以上下ったでしょうか、道が舗装されたところまで来ると、ビニールハウスのある住宅があって、そこにいらっしゃった男性の方に相方が道を尋ねました。もう、すぐ下ですよ。少し下って右に曲がれば公園があってそこですと教えて頂きました。

「上からずっと降りて来たのですか?」と、少しあきれた表情で聞かれました。言われたとおりに行くと、確かに公園があり右側に自然なのか人工なのか分からない、見た感じは自然のような奥行きのある短い洞穴があり、その横の階段を上がると親鸞聖人の立像がありました。

台座まで入れると高さ4~5メートルほどある、思ったより大きな像です。像の顔を見て意外に思いました。親鸞と言えば「鏡の御影」などの肖像にあるようないかつい表情が印象にあるのですが、この親鸞像は少し微笑んだ表情で眉が垂れている。いかにも好々爺といった笑顔で正面を見ている。こんな表情の親鸞像は珍しいのではないかと思います。その親鸞像のある左下に小さいやしろの中に一人の女性の坐像がある。どなただろうと見ると玉日宮とあります。中世の女性の衣装については分かりませんが、身分の高い女性の普段着のようにも思いました。会社に帰ってから「玉日宮」を調べてみると「玉日姫」ともあり親鸞聖人の内室とありました。恵信尼と同一人物との説もあるそうですが尼僧の姿をしていなかったの分かりませんでした。そうか親鸞の奥さんだったのか、なるほど奥さんといっしょなら笑顔なわけだと思いました。親鸞像の後ろに回ると、聖人の後ろの足元に少し小さく、修験者姿の弁円さんが、聖人をお守りするかのようには手を合わせて座っています。弁円さんとは、元常陸国の山伏でした。同じころ常陸にいた親鸞をねたみ、殺害しようと親鸞を訪ねるが、対面するやいなや親鸞の弟子となり明法と名のついで僧侶となり常に親鸞のそばにいて教えを聞いたと伝えられているとのこと。

浄土真宗といえば、恐らく我が国の仏教諸宗のなかで一番檀家の多い宗派でしょう。ですから南無阿弥陀仏の念仏と共に日本では一般的で代表的な仏教宗派と思う人々が多いと思いますが、教義的には非常に独特な、日本仏教そのものが独特と言えるのですが、中でも真宗は独特な、日本独自の宗派と言えます。とはいっても親鸞は、鎌倉新仏教のパイオニアといえる法然の弟子であり、法然の教えを伝えているといった意識しかなかったようで、彼が浄土真宗という言葉を使うときは師法然の正しい浄土宗はこうだというくらいの意味だったよ

うです。

親鸞は、承久の法難(1207年)によって専修念仏が禁止され越後に流罪となります。師の法然は土佐国へ流されました。親鸞は当時日本で初めて妻帯を公言した僧であり、また、承久の法難によって還俗させられたこともあり、僧に非ず俗に非ずとして、自らを愚禿(頭を剃った愚か者)親鸞と称しました。

専修念仏とは、自らの修行によって悟りを得ることの出来ない、煩惱の海に浮沈する人間には阿弥陀仏の誓願による念仏以外に救われる道はないとする教えであり、他力という。この考えは仏教に於いては異端といえます。他力本願と批判される所以です。しかし、法然や親鸞の他力思想は深い。

日本の仏教書の中で最も読まれている1つ、「歎異抄」という本は親鸞の弟子、唯円という僧が書いたとされています。作者については説がいくつかありますが唯円大徳が最も有力で定説となっています。しかし、この本が広く読まれるようになったのは明治以降のことで、哲学者・仏教学者で僧侶の清沢満之らの仕事によるといわれています。それ以前は、本願寺中興の祖といわれる室町時代の僧、蓮如によって誤解を招くとして門外不出とされ、一般の門徒にも閉ざされていたようです。その、

「第一章

弥陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひ立つ心の起こる時、即ち撰取不捨の利益に預けしめ給ふなり。

弥陀の本願には、老少・善悪の人を択ばれず。ただ、信心を要すと知るべし。その故は、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします。

しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏に勝るべき善なき故に。悪をも怖るべからず。弥陀の本願を妨ぐる程の悪なきが故に。と云々」(歎異抄 安良岡 康作 訳注 旺文社文庫より)

唯円が師親鸞の言葉を聞いて記憶した言葉を綴ったといわれるこの本の前半の第一章の文章です。この本を私が初めて読んだのは、まだ二十歳になるかならないかの頃でした。これが仏教と言えるだろうか、驚きました。しかし、感動もありました。

また、この本の後記において、作者は親鸞の言葉をこうも述懐します。

「…(略)弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、偏に、親鸞一人がためなりけり。…(略)…」(同)

弟子にこう話す師親鸞。これを聞いて感銘を受ける弟子唯円。この本を読んで以来、いつもそばに持つ、所謂、私の座右の書となりました。

鵜渡越公園 「親鸞聖人像」

「一、大正十四年立教開宗七百年を記念して奉安

一、昭和十九年大東亜戦争のため解体供出
一、昭和四十一年復旧」
とありました。

この日は、13時半に私どものアポイントメントを受けて頂いていました。江迎本陣跡(山下家もと蔵と共に県指定有形文化財)を所有される、潜龍酒造株式会社 代表取締役 山下 庄左衛門社長(第13代御当主)にお話を伺いました。折からの台風10号の被害が県北各地に発生したばかりで、本陣跡にも影響があり大変お忙しい中にもかかわらず、快くお会いさせて頂き、本当に有難いことでした。そして大変貴重なお話を頂きました。

今回の取材は、今回観光事業の主幹的存在である向(むこう)がメインとなり、当社本件事業について、潜流酒造様と江迎本陣跡のネットによる紹介(英文により外国人向け観光コース)と観光コース設定に向けての説明・ご了承も目的の一つでした。

山下社長は、とてもお話しの上手な方で、15分~20分くらいを頂けたらと思っておりましたが、本陣内の案内や説明を加えると1時間以上お話し頂き、初めて見聞きすることがたくさんあり本当に勉強になりました。最初は応接室でのお話しで、松浦・平戸の歴史や地域経済のことから、鎮信流茶道、お酒の楽しみ方、最近では温暖化の影響で伝統的酒蔵による酒造方法が難しくなってきたこと等々をお聞かせ頂きました。また、本社は江迎川の河口川岸にあり、河口付近は海水と淡水が混ざり合っていて本社駐車場から海水・淡水両方の魚の釣りが出来ること、ある時、その江迎川に外洋に棲むマンボウが上がってきて騒ぎになり、大学の先生が調べに来たというエピソードなど、楽しい話もお聞かせくださいました。

また、その後、江迎本陣跡内をコロナ禍で休業中でしたが特別にご案内頂き、建物の構造や、歴史的に貴重な品々(中には遊学の為平戸藩を訪れた吉田松陰が萩に帰ってから葉山鎧軒に送ったという硯石もありました)を拝見し説明を聞きました。庭内の水琴窟では、竹筒に耳をあて、その琴の音のような水の音も聞かせてもらいました。山下社長のお話しはとても興味深く時間の立つのを忘れ、品々を写真にとることまで忘れて聞き入ってしまいました。柔らかく丁寧な中に、本当に博識でいらっしゃると思いました。

プロ野球で名選手・名監督・解説者・野球評論家として活躍され、今年2月に亡くなった野村勝也さんが座右の銘としてよくテレビなどでも言われていた、『勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし』の言葉は、肥前国第9代平戸藩主松浦清(静山)の著書「甲子夜話」の中の一節であることも、このとき教えて頂きました。松浦静山は江戸住まいが長く、洗練された都会人・教養人

であったとも話されていました。

裏山の崖を利用した綺麗な庭園は、寿福寺の庭園と同じ庭師の手によるとのことで、言われてみれば、趣というか雰囲気似ているように思いました。

潜龍酒造株式会社

代表者 代表取締役 山下庄左衛門(第十三代)

所在地 長崎県佐世保市江迎町長坂 209 番地

連絡先 TEL0956-65-2209 fax0956-65-2404

創業 元禄年間(1688年頃) 昭和29年4月法人化

1688年(元禄元年)平戸藩の七浦奉行を務めていた初代山下庄左衛門が藩命により現在地で酒造業を始める。

創業当時から継承してきた伝統的な技法で酒造りを続け、現在も使われているもと蔵(酛蔵)は元禄年間の創業当時の建築と伝えられており長崎県指定有形文化財となっています。

※地元江迎町産の山田錦を使用した特別純米酒「ボーノ(BUONO)」の他、秋限定「ひやおろし」、「夏純吟 父の日ラベル」など数々の新商品発売、また、佐世保市の蔵元「梅が枝酒蔵」と共に、東京は渋谷とコラボ『佐世保×渋谷』の販路創設をするなど発想豊かな商品開発等も意欲的に取り組まれています。

潜龍酒造の取材は、大田尾部長も車に同乗していましたが、3人は多過ぎるかなど、彼には車で待ってもらっていました。取材が終わり車に戻ると、早速相方である彼が、帰り寄る所がありますという。「石橋.の良い画像がないか聞いてきます」と言って相方は吉井町の佐世保市北部商工会の建物へ入って行きました。私と向は入口の外で、道路の金網に寄りかかって、佐々川に架かる橋とその下の川辺や水の流れを見ていました。「岸の岩に丸い小さな穴が何個もあるでしょう」と向が話しかける。「あるね」「ポットホールって言います」そんな会話をしている時、「なかったですね～画像」と言いながら相方が戻ってきて、「あっ、こんなところにあった樋口橋！」

「えっ、何が？」

「橋です。樋口橋。ずっと探していたんですよ。何回も上を通っていて気付かなかった。車を運転して通っていると分からんものですね」

相方の話に依れば、皇居の二重橋のイメージを真似て大正時代に造られた、コンクリート造りではなく、石を積み重ねて造られた石橋だそうで、佐世保市の有形文化財という。

そういうことで、相方は樋口橋の写真を何枚か撮って、すぐ近くにあるという、ポットホールのたくさんある「ポットホール公園」に行ってみることにな

りました。

樋口橋から車で5分とかからないところにポットホール公園がありました。佐々川の中流、川岸を全長500メートルにわたり整備した、美しい自然を觀賞するために作られた公園。遊歩道の下、以前は川底だった岸边は、大きさも形も様々な岩と岩盤で、その岩や岩盤にたくさんの円筒形の穴が出来ている。その穴を「ポットホール」、また、「甌穴(おうけつ)」や「かめ穴」と呼ばれているそうです。

ネットで調べてみると、川底の硬い岩にできた傷やくぼみの中に、小石が入り込み、水の流れて小石が回転し、長い年月をかけて岩に丸い穴ができる。また川底の岩も水の流れて削られていき、川底が段々低くなって岩が水面より高くなり現在の景色となったと説明があります。公園には大小600個余りのポットホールがあるとも書かれています。

きれいに整備された公園は散歩コースとしても最適です。それに、ポットホールもですが、佐々川と周囲の全体的景観もきれいでおもしろい。山の方となる川岸は「千枚屏風岩」と言われる正に屏風のような凹凸で垂直な岩壁、その間を川が流れる様子は大袈裟かもしれませんが、写真でしか見たことのないグランドキャニオンを思い出しました。ミニチュアのグランドキャニオンのようだと思いました。おもしろがって岩盤の上を歩きながら、ふと不安になり靴の裏を見てみると、安物の革靴の外底に小さな穴が開いていました。

ポットホール公園

住所 佐世保市吉井町大渡

Tel 0956-24-1111 (公園緑地課)

アクセス バス 佐世保駅からバス50分

「吉井河公園公園前」下車(吉井世知原線)

車 佐世保駅から妙観寺トンネル経由で約30分

別情報

住所 佐世保市吉井町前岳免158-1

Tel 0956-64-3111(吉井行政センター産業建設課)

「すぐ近くに『御橋.観音』がありますよ、この上です」と、同行の2人が言う。出不精の私は「60年以上佐世保にいながら、いろんな所いっちょん行ったことない、御橋観音も見たことない」と言ったら、2人が「行ってみましょう」と言って、御橋観音へ行くことになりました。

公園からは歩いてみすぐ、赤茶色(錆びた?)のアーチ橋を渡って登っても行け

るそうですが、私たちは、その少し先から登る路を車で登りました。車で2～3分で御橋観音寺の駐車場へ到着。相方の案内で、檀家の方か観光客か、ちらほらと訪れる人の中を、石仏の並ぶ境内に入り奥へ進む。相方はずっと奥へ歩いて行く。奥の院にでも行くのかと思いつつ後をつけると行き止まりとなり「此処です」という。岩の壁は洞穴のような窪みがあるがそれだけで厨子のようなものもない。さて、とっていると「上です」と、また相方がいので見上げてみると「おおっ、これは…」「すごかでしょう」

頭上20メートルくらいの所に、うっそうと木々が茂る岩の両岸に巨大な自然の石の橋(正に橋としか言いようがない)が2本横たわっている。写真では何度か見たことはあるが、この迫力は実際に見ないと伝わらない。こんな高いところに、しかもこんなに大きいとは思わなかった。後で調べてみると長さ27メートル、幅4メートル弱の天然の石橋で平戸八景「石橋」として知られるとある。

遙か昔、一帯は海で、第三紀砂岩の浸食でできたと考えられているともある。また、境内のシダ群落は国の天然記念物に指定されているとも説明されていたが、その時は知らなかったこともあり注意して見ていなかったから、この石橋の迫力に圧倒されてシダについては記憶にない。もっと勉強してから来るべきだった。しかし、石橋を見たことだけで行った価値がありました。

山号は石橋山(せっきょうざん)、御橋観音寺(おはしかんのんじ)真言宗智山派のお寺。伝承によれば、養老年間(8世紀初め)に当時この地を巡行していた行基によって開かれたとされる。本尊は十一面観音坐像とあります。

これは、佐世保市中心部福石町の古刹福石観音(正式には清岩寺、三号は福石山、真言宗智山派の寺院)とほぼ同じ謂れで、福石観音の本尊も十一面観音です。福石観音の本尊は木彫りの立像です(世に言う、行基一刀三霊の作で、その中の「十一面観世音菩薩像」)。

古い日本地図の行基図は、社会科の教科書か何かで見たことのある方が多いと思いますが、行基菩薩として親しまれる行基とはどんなお坊様だったのでしょ

うか。
行基、668年～749年、奈良時代の日本の僧。国家機関と朝廷が定めた以外の直接の民衆への仏教の布教活動を禁じていた当時、禁を破り畿内(近畿)を中心に仏法の教えを説き、民衆・豪族を問わず困窮者のための施設等をつくり、救済活動・社会事業を各地で行った。人々より篤く崇敬された、とあります。井上靖さんの小説「天平の薨」の中で行基について以下のように書かれています。

その前に、小説「天平の薨」の舞台は、聖武天皇の天平4年第9次遣唐使発遣が決まり、その翌年遣唐使船が大津浦を出港します。その中に栄叡・普照・玄朗・戒融の4人の留学僧も乗船したのですが、その目的は、日本にはまだ仏

教界に戒律がそなわっていなかったため、適当な伝戒の師を招請するという大きな役目を担っていました。航海するだけでも命がけの使命でしたが、結果として鑑真和上を日本に招くまでに20年の歳月を要します。鑑真和上も日本への渡航に失敗すること5回、疲労などにより両眼を失明するも6度目で来日を果たします。その時、鑑真と共に帰国した留学僧は4人のうち普照ただ一人でした。

さて、後に日本初の大僧正となる行基についてですが、小説の文中、留学僧たちが唐へ渡って間もなくの頃、4人は久し振りにいっしょになって、会ったばかりの優秀な日本の大先輩、玄昉について話し合う…

『三人の話しを黙って聞いていた戒融は、最後に口を開いた。

「玄昉は行基とともに義淵の門だ。年齢も同じくらいだろう。玄昉は入唐して濮陽の寺にはいった。行基は日本で庶民の中にはいった。玄昉は法相を学んだ。行基は病者に薬を与え、悩める者には祈祷を行った。橋がないところには橋を設けた。街頭において道を説いた。玄昉は異国において法相を学び、その奥義を究め、学際群を抜いてその国の天子から紫の袈裟をもらった。行基は乞食と病人と悩める者の先頭に立ち、町から町へ、村から村へと説法して歩いた」

ここで、戒融は知らず知らずのうちに興奮してしゃべっていた言葉を切った。妙にその戒融の口調に気押されたような気持ちで他の者は黙っていた。すると、急に戒融は照れたように笑って、

「というわけだ。どちらがえらいか、それは知らん」

それだけ言うと、戒融は普照たちに背を見せ、そのまま歩き出した。』(井上靖著「天平の薨」旺文社文庫より)

先にマンガ「火の鳥鳳凰編」で重要な登場人物として少し紹介した良弁も義淵の弟子であり、大仏殿建立にあたっては行基と協力して聖武天皇を助けたそうです。小説「天平の薨」の中で良弁が、鑑真と普照を東大寺大仏殿の案内をする場面があります。

御橋観音寺

佐世保市芳井町直谷 94 番地。

札所等 九州八十八ヶ所第 75 番

九州三十三観音第 29 番

周辺 佐々川・ポットホール公園・佐世保市立吉井中学校・佐世保市立吉井南小学校

ご住職(黒髪山大智院第 44 世御院家)の読経の中、力強い般若心経が流れてき

た。続いて不動明王の真言が繰り返し唱えられる。その真言をウキペディアその他ネットで調べると、その中咒は、

ノウマク サマンダ バサラダン センダンマカロシャダ ソワタヤ ウン
タラタ カン マン

と書いてあります。しかし、どこで聞いても私の耳には少し違って、

ノウマク サンマンダー バーサラダン センダンマーカロシャダヤ ソワ
タヤ ウンタラター カン マン

と聞こえる。ですから後について声を出して唱えるときは、聞こえるとおりに御唱和させて頂いています。梵字は分からないので、解説などを読むと「忿怒の形相をされている不動明王よ、全てを打ち砕きたまえ」等の意味があるそうです。現況の破壊と再生を願い、新しい自分の実現と出発へ深層心理を呼び覚ます真言なのでしょうか。密教についてはほとんど知識はありませんが、修験道などでも唱えられ、よく耳にするからか私も好きな真言です。

パチパチと音を立てて護摩焚きの炎がゆれながら高く上がる。私たちと同じく、それぞれに祈願に来ている、檀家の方たちだろう首に輪袈裟をかけた年配の善男善女が御院家に合わせて心経を唱えはじめる。私も般若心経は憶えていたので少し恥ずかしい気持ちもあつたが声を出して唱和させて頂いた。

佐世保市中心街戸尾町に伽藍を構える名利黒髪山大智院(現在の武雄市山内町に今から 1200 年以上前に弘法大師空海が開創され、明治 41 年に現在地へ移転した古刹。真言宗大覚寺派別格本山)。この日取材を兼ねて、本ステップアップ事業の成功を祈願して事務所の仲間たちも合わせメンバーが祈願法要にお伺いしました。

〔仏説摩訶〕般若波羅蜜多心経

(唐三蔵法師玄奘訳)

観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是、舍利子、是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減、是故空中、無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界、無無明、亦無無明盡、乃至無老死、亦無老死盡、無苦集滅道、無智亦無得、以無所得故、菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙無罣礙故、無有恐怖、遠離〔一切〕顛倒夢想、究竟涅槃、三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提、故知般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、是無上咒、是無等等咒、能除一切苦、真實不虛、故説般若波羅蜜多咒、即説咒曰

揭帝揭帝、般羅揭帝、波羅僧揭帝、菩揭僧莎訶

般若〔波羅蜜多〕心経

(「般若心経」 金岡秀友(1927年～2009年7月)校注 講談社文庫より)

『般若心経』一訓読

〔仏説摩訶〕般若波羅蜜多心経

観自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したもう。舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず。色はすなわちこれ空、空はすなわちこれ色なり。受想行識もまたかくの如し。舍利子よ、この諸法は空相にして、不生にして不滅。不垢にして不淨。不増にして不減なり。是の故に空の中には色も無く、受・想・行・識も無く、眼・耳・鼻・舌・身・意も無く、色・声・香・味・触・法も無く、眼界もなく、乃至意識界も無し。無明も無く、無明の尽くることもなく、乃至老死も無く、亦老死の尽くることもなし。苦集滅道もなし。智も無く亦得も無し。無所得を以ての故に。菩提薩埵は、般若波羅蜜多に依るが故に、心に罣礙無し。罣礙無きが故に、恐怖あること無し。〔一切の〕顛倒夢想を遠離して、涅槃を究竟す。三世の諸仏も、般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たもう。故に知る、般若波羅蜜多は、是れ大神咒なり、是れ大明咒なり、是れ無上咒なり、是れ無等等咒なり。能く一切の苦を除き眞実にして虚しからず。故に般若波羅蜜多の咒を説く。即ち咒を説いて曰く。

揭帝揭帝、般羅揭帝、般羅僧揭帝、菩提僧莎訶

般若(波羅蜜多)心経

(同 上)

私には般若心経を語る知識も能力もありませんが、短くて憶えやすく、内容の理解は別として私なりに非常に論理的に思われ、紹介したかったので書きました。

ただ、次の文言の意味等については著者である金岡博士の、この本から少し紹介させていただきます。

観自在菩薩…観世音菩薩(観音様)

五蘊…ものところの五つの働き。

- 一、色蘊(目に見えるもの。変壊(へんね)するもの。いわゆるもの。これに形をあらわす形色と色をあらわす顕色を二大別する)。
- 二、受蘊(外からの刺戟をうけとめる作用。印象作用)。
- 三、想蘊(受けとめた印象を頭にうかべる作用。表象作用)。
- 四、行蘊(意志と行動の作用)。

五、識蘊(意識の作用)。

、
マントラ(真言)の部分の漢字表記は、上記の漢字と一部違って
羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶(ぎやていぎやてい、はらぎやてい、はらそうぎやてい、ぼうじそわか)と現行はなっているそうです。

サンスクリット語をカタカナで表記すると

「ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハ」
だそうです。

また、その訳については、この本の中で、次のお二人の大家の訳を紹介されています。

“往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往ける者よ、さと
りよ、幸あれ” (中村元博士訳 1912年～1999年10月)

“至れり、至れり。彼岸に至れり。彼岸に到着せり。悟りにめでたし。”

(渡辺照宏博士 1907年～1997年12月)

般若心経は、最初の三蔵法師である鳩摩羅什(クマラージュ)の漢訳も有名だそ
うですが、日本では玄奘訳の心経が一般的で広く親しまれているそうです。

日本でも西遊記で大人も子供も知っている三蔵法師玄奘は、629年国禁を破って
天竺(インド)へ陸路で向かい、その行き帰り幾多の困難に遭遇するが、多くの経
典等とともに645年長安へ帰った。

玄奘は幾度も砂嵐に見舞われたが、帰路のときだったか激しい砂嵐に遭い前
後左右全く分からなくなり身動きが取れなくなった。その時玄奘はただひたす
ら般若心経を誦んだ。すると砂嵐は止み、旅を続けることが出来たと以前何か
で読んだことがある。

この功德をどう解釈しようか。心経にはある意味唯物的ともみえる冷徹なま
での論理に構成されている側面があると思う。玄奘は嵐の中で自分の選択した
人生、使命や運命を静かに受け止めようとしたのではないか？、玄奘には、心
経に現世利益的奇跡を求めていたわけではないだろう。砂嵐が止んだのは偶然、
自然現象がそうなたただけだろう…40歳代頃の私ならそう考えていた。しかし、
還暦を過ぎた今、何故かそれだけではない、何かもう一つがあるように思える。
短絡的に現世利益があるという訳ではない。私には言葉では説明できない何か
と言うほかはない何かを。

成功祈願の護摩法要が終わって、みんなと帰る時、何故か肩が軽くなったよ
うに感じたのは気のせいでしょうか。

黒髪山大智院 山号は黒髪山 真言宗大覚寺派別格本山

開基は弘法大師空海。遣唐使の留学僧として渡唐の途中、留学の目的達成を肥前国(現在の佐賀県武雄市山内町)黒髪山大権現に祈願、806年(大同元年)の帰国後に満願成就を報告した際に自らの爪で不動尊を刻し、弟子快護に託して山内に庵を造らせたのが寺の起源と伝わる。

1645年(正保2年)、当時の住職尊覚が京都大覚寺門主の尊性法親王に招かれ書講を行い、その功績により大覚寺内塔頭「大智院」を下賜された。以来、当寺住職は「院家」の敬称で呼ばれるようになる。「和漢三才絵図」等にもその名が記載されている。往時は約80もの末寺を抱える肥前の大勢力であった。(略)

1908年(明治41年)現在地へ移転。(ウキペディアより)

佐世保市戸尾町 9-8

(再び平戸そして生月へ)

ステップアップ事業の期間もいよいよ終わりに近づいた9月25日、大田尾部長が私に「明日は生月に行ってみましょう」と言ってきました。

「明日土曜は合宿だけど時間ある？」

明日の土曜日の昼過ぎからは、これまでの成果の発表と練習を兼ねて事務所みんなを平戸観光案内を行う合宿の予定です。生月は取材したかったのですが、他の観光地調べで時間が取れず、諦めていました。

「朝早くから出ることでできませんか？向さんも生月には行ってみたいと言いますから3人で行きましょう」

最後のチャンスだし、土曜で事務所に来客の予定もなかったので、私の仕事の予定を変更して朝から行くことにしました。

生月は何年ぶりだろうか、とは言っても以前行ったときは何かの行事に出席する上司を車で送り、橋の袂の公園駐車場で待っていただけだったので橋の形の記憶もない。初めてと言ってよい観光取材となりました。

この日は風が少し強く、小雨交じりの空模様での中出発でした。平戸に入り、もうすぐ生月大橋という頃、前方に海が開けてきた。どんよりとした空の下のドライブ、助手席にいた私は何となくぼんやりと、目に入る島影を眺めていたが多分それが生月隠れキリシタンの聖地「中江の島」だったとは後で知りました。全長400メートル、幅50メートルの細長い無人島。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として登録されている。また、国の重要文化的景観「平戸島の文化的景観」にも含まれている。上陸は禁止されている。禁教の江戸時代、この島はキリシタンの処刑場でした。

「十九世紀のフランス人日本史学者レオン・パジェスが著した『日本切支丹宗門史』によれば、中江の島は刑場として重宝された。斬り捨てられた首も離れた胴も、無造作に海に投棄された。何十人惨殺しても、あとは波濤が洗い流し、

痕跡を消してくれる。取り締まる側にとって海上の岩礁は、遺体の処理に都合がよかった。」(消された信仰 「最後のかくれキリシタン」—長崎・生月島の人々 広野真嗣 著 小学館 より)

生月のキリシタンはこの島のことを「サンジュワン様」「御三体様」と呼ぶそうです。

イタリア人神父に協力したことで 1622 年 5 月「ヨハネ坂本とダミヤン出口が、斬首となり、翌月にヨハネ次郎右衛門が処刑された。

1624 年には、出口と坂本の家族 11 人が中江の島で殉教した。出口の末子で 7 歳のイサベラは殺された母の遺体の上にひれ伏したまま切られた。坂本の子ども 3 人は俵に詰めて縛られ、島の沖で海に投げ込まれた。

中江の島で処刑された 14 人のうち、坂本、次郎右衛門、出口の子の 3 人が「ヨハネ」の洗礼名を持っていた。「ヨハネ」はポルトガル語で「ジョアン」と読む。島の中央部には、かくれキリシタンが建てたほこらがあり、3 体の「ジュワン様」の像を安置している。生月のキリシタンは島を「サン(三)ジュワン様」や「御三体様」と呼ぶことで、殉教の記憶を大切につないだのかもしれない。」(祈りの記憶 長崎と天草地方の潜伏キリシタンの世界 松尾 潤 著 批評社 より)

ヨハネ次郎右衛門は、死刑宣告を受け中江の島へ向かう船の中で「ここから天国(パライズ)はもうそう遠くない」と言ったと伝えられているそうです。

また、この島には「サンジュワン様の御水(聖水)」を汲み取る「お水取り」の儀式も伝わる。禁教期から受け継ぐ「ごしょう」というキリシタンのオラショを唱えると岩の裂け目から水が染み出す。これが聖水の「お水」であり、かつては洗礼に用いていたが、近年は洗礼を授かる人がいない。現在では家にまいたり、「オマブリ」と呼ばれる紙の十字架に振り掛けたりして、主に清めに使う。聖水は、隠れキリシタンが「ごしょう」をしないと水は出て来ない。キリスト教の祈りではだめだとのこと。

(参考文献 上記「消された信仰 「最後のかくれキリシタン」—長崎・生月島の人々」 広野真嗣 著、「祈りの記憶 長崎と天草地方の潜伏キリシタンの世界」松尾 潤 著、その他ウキペディア他)

いよいよ、生月大橋を渡る少し手前、春日の集落入口の手前でもあるところで、何十トン、いや百トン以上はあろうかと思われる山の斜面からの大きな岩の落石と、崩れた崖を修復している現場の横を通った。台風による被害でしょう。コンビニエンスストアの看板が残っていましたが、幸い、そこにコンビニがあったわけではなさそうでした。「あんなのが落ちてきたら、たまったもんじゃない」「ひとたまりもないでしょうね」そんな会話を交わしながら超大型台風の爪痕を眺めながら通過しました。温暖化の影響でしょうか、最近の台風の大

型化が懸念されます。

春日集落入口を横目に見ながら生月大橋が目前となりました。

平戸島と生月島を隔てる辰ノ瀬戸に架かる生月大橋は、鉄道橋に多く見られる三角形の網状の巨大な筒のようなトラス橋で、トラス橋としては世界最大級(橋長 960m(前後の高架橋を含めると 1,332m)最大支間長 400m、幅員 6.5m)というだけあって、スカイブルーの美しい色だが、平戸大橋の優美な印象とは少し違い精悍な迫力がありました。そのせいか平戸大橋を渡る時より波が荒く感じました。

渡り終わると大橋公園でちょっと休憩し、相方の大田尾部長は大橋をやはり写真撮影している。彼の撮った写真は既に 2,000 枚を優に超えている。もう一人の向(むこう)は、公園のあちこちを歩いて見て回っている。私は売店の庇の下のベンチでちょっと一服。3人は、ほぼ同時に車に戻り出発した。私は何処へ向かうのかも知らず相方の運転に任せていました。

まだ強い風は残っていましたが、雨はしだいに小雨となり、雲の合間の青空は段々広がって行って、過ぎてゆく緑に囲まれた私たちは車窓を眺めながら、いい景色やね、小さな島だけ大自然って感じがするなどと話し合っていた。たしかに、自分たちが走る比較的新しいアスファルトの道路以外は人工物がない。左側(西側)の波の荒い青い海と反対側の迫りくる山は濃い緑色の森が繁茂している。ちょうどあった休憩所で一休みして周囲を見ることにした。竣工平成八年と道路のことを立札(説明板)にある。その人工物を目にしながら1人が山の方を見上げて、ジェラシックパークのようですねと言う。ほんと、プテラノドンが飛んでくるようですねともう1人が言った。

「おーっ、あれはすごい。」1人が言う。その方向を見ると、荒波の青く広い東シナ海へ続く海に遠く切り立つ大きな断崖に私たちは驚いた。

「すごいですけど、私たちが行こうとしている断崖とは方角が違いますね」と相方が言う。確かにそれは、私たちの向かう方向とは逆の方であった。

「だったら、今から行こうとしている所はもっとすごい断崖ばいね？」

後日、聞いたところによると私たちが走行したコースは、サンセットウェイと名付けられた絶景ロードであり、自動車の各メーカーがテレビコマーシャルに使っているとのこと。また、自然がそのまま、ほとんど映像的加工が必要ないところから、海外からもコマーシャル等で撮影に来るらしい。私たちの驚きはさほど大袈裟ではなかったのです。

休憩所をあとにししばらく走ると、相方が目的地としていた「塩俵の断崖」へ到着しました。運転した相方の大田尾も来たのは初めてだと言います。

アレっ、何あれ?、波頭高く打ち寄せる垂直の断崖に六角形に見える巨大な岩の柱がいくつもびっしりと、まるで蜂の巣のようにとおもうか、それとも買った

ばかりの入れ物の中に詰まる爪楊枝のように、真っ直ぐに打ちつけられている。これが第一印象でした。

長く続く断崖の海岸線に、ひととき不思議な形をしている断崖とネットなどにも記述されている。その説明によると、この奇岩は柱状節理といい、溶岩台地の上に玄武岩が重なり、垂直方向に亀裂が入って5~7角形の断面を作ることにより、柱がいくつも立っているような形になるとある。南北500m高さ約20mの規模があり、その見事な景観は、長崎県新観光百選にも選ばれているそうです。雨が上がり青空のもとではありましたが、まだ9月というのに風が肌寒く感じながらも、来てよかった。

続く断崖を眺めながら歩いて、次は大バエ灯台へ到着。およそ100mの断崖の上に立つ白い灯台。空の青さにその白い姿がよく似合う。展望デッキに登るとそこからの眺めは360度の正に絶景でした。玄界灘の深い青の海と空のスカイブルーのコントラストが水平線にくっきりと美しい。浮かぶ雲は眩しく見える。灯台の下では大田尾と向が垣根に少し空いた隙間へ頭を入れ「おーっ」とか声を出して笑っている。年齢58歳の二人がまるで小・中学生のように遊んでいる。何かあるの？と私が尋ねると「見てみますか…」1人が言うので、私も頭を入れて覗いてみると、垂直の断崖の下、岩場とそれに寄せる波が吸い込まれるような100mの真下に見える。すぐに頭を引っ込めた。すごいでしょうと言われ、高いところは苦手な方だから心臓に悪いと応えました。

春には、この白亜の灯台の上空を、鳴き声を交わしながら北へ帰る鶴たちの群れが渡って行ったことだろう。北帰行の観測できる場所でもあるとのこと。

塩俵の断崖

長崎県平戸市生月町壱部 1560

生月大橋から 25分

大バエ灯台

長崎県平戸市生月町御崎 26-2

正午を回り、そろそろ、昼食にしようとして話し、予定していた生月名物「あご出ししラーメン」を食べるため、相方大田尾の勧めで、地元で有名な「大気圏」というお店に入りました。独特の長い箸で美味しく頂きました。3人は、ラーメンが出てきてすぐに食べ始めていると、相方が「しまった」と突然言う。どうしたのかと聞くと写真を撮ってなかったという言う。相方はお店の人をお願いして、別の出来たばかりのラーメンを撮らせてくれとお願いしている。はじめ怪訝な顔で見られていましたが、例の通行手形を見せて説明し、撮らせてもら

っていました。にっこり笑って「撮りました」と言って、また食べ始めました。近くに、生月観音像が見えます。やはり、ここは見ておきたいと寄ることにしました。

館浦漁港(たちうらぎょこう)を見下ろす高台に建つ巨大な「生月大魚籃観音」。ブロンズ像としては日本屈指の大きさと高さ 18m、基壇(きだん)3m。昭和 55 年(1980)に海難者と魚介類の霊、世界平和を追悼し、漁船の航海安全を祈って、地元出身で科学技術庁々官、農林水産大臣を勤めた故金子岩三氏が建立した。魚籃観音? そんな観音様あったのか…、ウィキペディアで調べるとありました。「魚籃観音は三十三観音に数えられる観音菩薩の一つ。中国で生まれた観音の一つで、同じ三十三観音のひとつである馬郎婦観音(めろうふかんのん)と同体ともされる。

中国唐の時代、魚を扱う美女がおり、観音経・金剛経・法華経を暗誦する者を探し、めでたくこの 3 つの経典を暗誦する者と結婚したがまもなく没してしまった。この女性は、法華経を広めるために現れた観音とされ、以後、馬郎婦観音(魚籃観音)として信仰されるようになったという。この観音を念ずれば、羅刹・毒龍・悪鬼の害を除くことを得るとされ、日本では中世以降に厚く信仰された」とありました。

生月は隠れキリシタンの島として有名ですが、また、漁業の島でもあります。「戦後は東シナ海の巻網漁業に進出、最盛期には 20 以上の大型巻網漁船団を擁し、島の経済は大いに潤った。近年は漁獲量の減少などにより船団数も激減している。」(ウィキペディア)

また、「江戸時代には益富組を中心とした沿岸捕鯨が活発に行われ、平戸藩の財政を支えていた。」(同)ともあります。

益富組とは初代益富又左衛門が生月に於いて、江戸時代中期に突組という捕鯨船団を興し操業していたとあります。

漁法は突取捕鯨法のみで行っていたが後、網取捕鯨法をに変わったとのこと。(平戸生月町博物館 島の館 生月学講座他)

もうかなり以前、佐世保で生月の漁師の方たちによる「勇魚捕りのうた」の実演を見たことがある。激しいドンドコドンドンと単調に続く太鼓の音が印象的で、よその国の原住民の音楽みたいだとその時は思いましたが、平戸瀬戸を潮流に逆らって登ってくるクジラを、勢子舟という 10m 弱の小舟に乗った勇猛果敢な漁師たちが銚一つで追い、立ち向かう姿を思い浮かべると、太鼓の音が瀬戸の荒波を突き進む小舟と、人間とクジラの心臓の鼓動とが重なるように想像され、臨場感あふれる仕事の歌であったのだと、今は思い出されます。

生月大魚籃観音

所在地 平戸市生月町山田免 570-1

交通 生月大橋より車 7 分

時間の関係で、この日は「島の館」も「山田教会(鉄川与助 設計・施工)」も寄らずに生月を出ました。私が残念がっていると、相方が 2 日後 1 人でもう一度生月に行ってくれて、山田教会の写真を撮り、島の館の発刊誌等を持ってきてくれました。

生月大橋を渡り平戸島側に着くと直ぐ春日集落入口の標識が目に入りました。

「やっぱり、ここは寄ってみたいですね」と向が言う。時間を気にしながらも 3 人は寄ることにしました。

入口の標識から少し入ると左手に少し登って左手に案内所があった。古民家を回収したような木造の建物名称は「かたりな」というそうです。

中に入ると、年配の男性が大きな写真で作られた地図を指しながら 1 人の若い女性に集落とその周辺(棚田や安満岳と隠れキリシタンの歴史)を説明しているところでした。女性は熱心に聴いていて、帰り際「有難うございます、今度はみんなで来ます」と礼を言って帰って行きました。私たちもその後、説明を聞きました。

「平戸島西岸に位置する春日町は 18 世帯、66 人が暮らす小集落だ。住民は約 460 年前の戦国時代にキリスト教に改宗し、禁教期には「潜伏キリシタン」となって、ひそかに信仰を続けた。

集落中央に棚田から半円状に突き出た「丸尾山」という小さな岩山がある。市教委が 2011 年度に実施した発掘調査で、多くの遺体を寝かせて埋葬した跡が見つかり、約 400 年前のキリシタン墓地と分かった。集落の景観は江戸時代からほとんど変わっておらず、禁教期の生活をしのばせる。国は 2010 年、春日を含む平戸島の西岸と宝亀地区を県内初の重要文化的景観に選定した。」(「祈りの記憶 長崎と天草地方の潜伏キリシタンの世界」 松尾 潤 著 批評社より)

「隣の休憩所でお茶でも飲んでいって下さい」と説明をしてくれた男性が言います。案内所には地元のお酒やら土産物を販売してあった。

「いや、何も買ってないし…」というと。

「そんなことは良いんですよ、よかったら寄ってお茶を飲んでください」

そう仰ったので、遠慮なく隣の休憩所(こちらも古民家を利用している)に 3 人が入ると、一人の年配の女性が、お茶を出してくれました。どうぞ、よかったらこれも食べて下さいと、ここで採れたというミナの佃煮も出して頂きました。心に沁みる、美味しさでした。

「来ていただいたお客さんにはみなさんに出しているんですよ。ただ、大勢の団体さんで見えたときには間に合わないので出せないんですよ」とも言われて

いました。味わいながら「おもてなし」とはこんなことをいうのだと思いました。

休憩所を出て車に戻ろうとすると、「うわっ、蛇だっ」と向が声を出した。庭の木の幹に1匹の蛇が登っていました。近づいて見ても、こちらには全く無関心のようにゆっくりと登っている。「びっきとり(ヤマカガシ)かな？私が言うと、余り興味なさそうに駐車場へ歩きながら「びっきとりには毒がありますよ」と相方が言う。「そうそう、びっきとりに毒があるって分かったのは比較的最近のことらしいね」と私が返すと、「けっこう強い毒だそうですよ。ただ咽の奥の方に毒があって噛まれても毒が届くことが少ないそうですね」とまた相方が言う。そんな会話を歩きながらして車に戻りました。

説明を聞いて、車で安満岳へ行って見ようかと細い道を車で登って見ましたが、棚田を横に、途中で行き止まりとなり、道を間違えたようでした。時間がないので、そこで諦めましたが、眼下には谷間に広がる棚田がきれいでした。

「400年前と同じ風景なんですよ」と言いながら相方が写真を撮っていました。

春日集落案内所「かたりな」

所在地 平戸市春日町166

Tel 0950-22-7020

開館時間 午前8時30分～午後5時30分

休館日 12月31日～1月3日

入館料 無料

重要文化的景観「平戸島の文化的景観」のガイダンス施設として、平成30年4月にオープン。春日集落に伝わる納戸神と呼ばれるご神体を展示しているほか、集落に関連する映像を見たり、各種パンフレットを置いている。

春日集落を出て車で少し走ると西に海が広がる。それを眺めながら、何とか生月に行けてよかった。短い時間で、よく見ることは出来なかったが、それでも春日集落と合わせ、思いのほか収穫だったと思いました。

G o T o トラベルを利用して社長が予約したホテルへ向かう途中、左手に白を基調とした大きな教会が見えました。

「大きくてきれいな教会やね、」と私が言うと、

「紐差教会ですね」と相方が応える。

「ちょっと寄れるかね、時間ないかね？」

「少しだけなら」

教会は、ちょっと坂を上がり石段が2段になって合計で50段くらいはあるだろうか高台の上にあります。登りながら、どこか仏教寺院のような雰囲気

あるなど感じました。大きな教会だと思ったのもそのはず、後で調べてみると「長崎市の旧浦上天主堂が原爆で倒壊して新たに建てられるまでの間、日本で最も大きい教会堂で会った」(ウィキペディア)と書いてあった。また、東洋でも指折りのロマネスク様式の大規模な天主堂と別の資料にもある。

教会建物の1部で、2階にある天主堂入口への階段左下の庭にファチマの聖母像があった。

ルルドの聖母と同じく、バチカンの認める奇跡に数えられる聖母であるから教会にはファチマの聖母もよく設置されているのだろうか？キリスト教や教会のことを知らないので、おやっ、と思った。ファチマ(ファティマ)の聖母の奇跡といえば、ファティマ第三の秘密(予言)が一時話題になったことがあったからだ。簡単に説明すると、「ポルトガルの小さな町ファティマで起きた、カトリック教会が公認する、聖母の出現の一つ。ローマ教皇庁は奇跡として認めたが、第三の予言は長年にわたり秘匿した。」(ウィキペディア)

1981年5月2日、アイルランド航空164便がハイジャックされた。犯人でカトリック修道士の要求は「ファティマ第三の秘密を公開せよ」だった。

1916年春頃、ファティマに住むルシア(日本ではルチアとも書かれる)、フランシスコ、ジャシンの3人の子供の前に聖母マリアが現れ、6ヶ月間続けて毎月13日に同じ場所へ会いに来るように告げた。聖母からのメッセージは大きく分けて3つあった。

1. 死後の地獄の実在

3人の子供は一瞬だが光線とともに火の海のような光景を見せられた。多くの人々は罪な生活、傾向によって、死後地獄へ導かれている。肉欲や傲慢など現世的な罪から回心しないままにいることにより、人は死後永遠の地獄へ行く。聖母は地獄の光景であると告げた。3人はその光景に戦慄した。

2. 大戦争の終焉と勃発。

戦争(第一次世界大戦)は間もなく終わる。しかし、人々が生活を悔い改めないなら、さらに大きな戦争(第二次世界大戦)が起き沢山の人が死に、そしてその多くが地獄に落ちる。その前兆として、ヨーロッパに不気味な光が見えるだろう。

1938年、ヨーロッパで巨大なオーロラが観測された直後に第二次世界大戦が勃発している。

3. 秘密

聖母マリアは、1960年になったら公開するように、それまでは秘密にするようにとルシアに告げた。その内容は「ファティマ第三の秘密」と呼ばれるルシア

を通じて教皇庁に伝えられたが、1960 年を過ぎても教皇庁は公開せず、2000 年になってから発表に踏み切った。教皇庁によれば教皇暗殺の危機だとされる。ヨハネ・パウロ 2 世はファティマ出現記念日である 1981 年 5 月 13 日に発生した事件を東欧の政権による暗殺未遂と発表しているが、前の二つの予言と比べると矮小が過ぎる(第三次世界大戦による核兵器使用や彗星の衝突による大災害等の可能性が考えられていた)点などから、多く疑問視されている。(参考資料ウィキペディア他)
だいたい、以上がファティマ第三の秘密です。

新型コロナの影響で、中には入れないので外観を見て回っていると、営業の池田常務から電話があつて、もうみんなホテルに着いていると言うので、あわててホテルに向かいました。

紐差教会

所在地 平戸市紐差町 1039
建物の概要 鉄筋コンクリート造り、2 階建て
鉄川与助 設計・施工
アクセス 平戸大橋から車で約 30 分
西肥バス「紐差」バス停より徒歩 1 分

ホテルでは社長以下 6 人がロビーで待っていました。私たち 3 人は急いで部屋へ入り荷物を下ろし、ロビーに戻った。大田尾と向の 2 人が平戸観光の案内をすることとし、私は今日見て廻った場所のメモの整理などのためホテルに残ることとしました。

帰ってくると、平戸には何度も来ているが、こんな風に見て廻ったことはなく、西教寺の三重塔の大きさには驚いたこと、フランシスコ・ザビエル記念教会がきれいだったこと等を話していました。持ってきた作りかけの資料や写真を見てもらい、みんなの意見も聞いたりして、議論を行いました。

翌日は、朝から平戸の商店街へ向かいました。平戸商店街は、古い街並みの景観を維持していて風情があります。そこでは朝市が開かれていました。最近全国各地で開催されている「軽トラ市」になっていましたが、売られている物は、やはり地元で獲れる海産物や地酒、野菜が多く出ていました。

「買い物をするなら、私に付いて来てください。買ってもらいたいお店があります」と相方大田尾が言う。皆が付いていくと、大きな古民家を利用した御菓子屋さんに入りました。

「この前はどうもありがとうございました」と相方。

「あら、大田尾さんでしたかね、わざわざ来て頂いたんですね」とお店の方。相方は数日前、一人で訪ねお話を聞かせて頂いたらしい。相方の話しによれば、このお店は「青い目の侍」三浦按針(ウィリアム・アダムス)が宿していた建物という。確かに「按針の館」とある。歴史ある和菓子のお店で九州で一番古い和菓子のお店だそうです。

平戸蔦屋

社 名 株式会社 つたや總本家

和菓子製造販売

所在地 本社工場 平戸市戸石川町 953-5

創 業 文亀2年(1502年)

創業以来平戸藩松浦家の御用菓子司として、そして「カスドース」をはじめとする伝統の平戸銘菓の担い手として代々に渡って“変わらぬ味”を守り続けている。九州最古の菓子店である。

以上で、このレポートを終わります。ただ、ダラダラと長い報告となってしまう。しかし、全てではありませんが、我々のステップアップ事業に対する行動の記録としてご報告することを目的と致しました。

この3ヶ月間は、周辺土地を巡るだけであつたにも拘わらず、私にとって大きな“旅”であり体験でした。本事業を企画された長崎県及び観光振興課の皆様には深く感謝申し上げます。

これからのタクシーはA地点からB地点までの移動手段だけでは生き残って行くことが難しい時代となりました。コロナ後は更にその傾向は顕著になると考えられます。そのような時代的潮流の中『観光』は、タクシー業にとっても大きな経営的支柱と成り得る数少ない具体的施策の一つです。

今回の本事業参加によって思ったのは、長崎県は、やはり観光資源の宝庫であると改めて実感したことです。

最後に、遠藤周作氏の次の文章を引用させて頂き締めくくりと致します。

「ただ長崎と言う多くの文化的背景をもっている美しくも古い街を一そしてやがてあの原爆に燃えた街を、たんなるエキゾチックな眼だけで眺めるべきではないと言いたかったのである。人は奈良や大和を旅する時、その歴史を知ってからいくだろう。だが奈良にも匹敵すべき長崎を訪れる時、雨のオランダ坂やピエール・ロティの蝶々夫人だけでは、あまりに勿体ないような気がするのだ。」
(「遠藤周作と歩く「長崎巡礼」 遠藤周作 芸術新潮編集部 編 新潮社より)

おわり

2020年10月 作成